

文部科学省特別経費

「女性リーダーを創出する国際拠点の形成」（平成22年度-平成27年度）

## 平成24年度「学生海外派遣」プログラム報告集

### 学生海外調査研究

国立大学法人 お茶の水女子大学  
リーダーシップ養成教育研究センター

平成 25 年 3 月 31 日

平成 24 年度「学生海外派遣」プログラム報告書 目次

タイトル	派遣者名	報告書	英文要旨
1960-70 年代における韓国の五柳里の 「家族計画オモニ会」活動に関するインタビュー調査	李 知淵 …	1	47
ヨルダンにおける乳幼児の保育、 及び子育ての現状に関する現地調査	小山 祥子 …	7	48
脂質ベシクル形態変化機構の解明； 実験,シミュレーションによる双方向のアプローチ	坂下 あい …	12	49
Suzan=Lori Parks による戯曲の上演資料調査	佐藤 里野 …	19	50
W.W. コベット (1847-1937) および 「ファンタジー」に関する資料調査	西阪 多恵子 …	24	51
パリ・オペラ座付属図書館における バレエ・デ・シャンゼリゼに関する史料調査	深澤 南土実 …	29	52
コミュニケーション方略の明示的指導の実践報告 —中国国内の中国人日本語学習者を対象に—	方 穎琳 …	36	53
民営中学受験からみる親の教育戦略の変化 —中国浙江省慈溪市の事例を通して—	馬 芳芳 …	42	54

学生海外調査研究	
1960-70年代における韓国の五柳里の「家族計画オモニ会」活動に関するインタビュー調査	
李 知淵	人間発達科学専攻
期間	2012年8月6日～2012年8月20日
場所	韓国全羅北道任實郡聖壽面五柳里、ソウル
施設	五柳里のマウル会館、国立中央図書館

## 内容報告

### 1. 調査の背景と目的

本調査研究は、1960-70年代における韓国の五柳里という地域の「家族計画オモニ会」活動を通して、「家族計画事業」の実態と農村女性にどのような影響と結果をもたらしたかについて検討することが目的である。「家族計画」に関する議論を絞ると、以下のようである。

第1は、出生率の低下、避妊による産児調節、人工妊娠中絶の増加

第2は、近代家族を生み出す行動のあらわれ（荻野 2008、田間 2001・2006 など）

第3は、新生活運動、主婦をターゲットにした避妊と近代合理的生活の指導（荻野 2009）

第4は、女性のエンパワーメント、意図せざる帰結をもたらした（李 2011a）

以上のような観点から、調査ガイドとなる仮説化に向けて、「韓国における近代的な母親像の成立過程を性・家族・出産をめぐる慣習の変わり目の時期である1960-70年代における「家族計画事業」を草の根的に支えた女性たちの体験を通して近代的制度としての女性のありようが形成された」を設定した。なお、本調査では、女性のエンパワーメントと自立に焦点づけて韓国における近代的な女性像の成立過程の特徴を考えていきたい。

近代家族は、「国家などによる制度的な誘導が不可欠（山田 1994）」で、諸力のポリティクスの結果であった（田間 2006）。韓国は、朝鮮戦争（1950-53）後、国家経済を再建するため、女性の役割が重視されるようになり、その一環として行われた政府事業としては、「婦女教室」（1947）、「生活改善倶楽部」（1958）、「家族計画オモニ会」（1968）、「セマウル婦女会」（1973）がある。これらの事業を通して、政府は女性の精神啓発・資質向上、家庭福祉の向上、健全家庭の育成、ひいては地域社会発展を図った（韓国女性開発院 1985）。しかし、それぞれの女性組織は、同一の村単位で同一の女性たちを対象に構成された。それゆえ一人が複数の組織に加入し、兼職するケースも多数あった。さらに上級機関間の協議で運営されるのではなく、所属女性団体を通じて独立的に同一の内容を相互に指導・支援するなどの副効果が生じた。その結果、1977年には、「婦女指導協議会等に関する規定」により、既存の4つの組織が統合され、新たに「セマウル婦女会」として再組織された。そして統合された「セマウル婦女会」は、1977年末に組織数 60,352 グループ、2,423,663 人の会員が参加し、大幅な組織の整備がみられた。また同婦女会は、「意識啓蒙事業」「家族計画事業」「生活改善事業」「貯蓄事業」などの村単位の啓蒙指導事業を中心とし、20歳以上60歳未満の女性を対象に科学的かつ合理的な教育事業を推進した（鄭慶均 1987）。このように、女性は国家の発展論理に統合される核心的な役割を果たした。

本研究では、「第1次経済開発5ヵ年計画」（1962-66）の一環として推進された「家族計画事業」の主要な担い手であった「家族計画オモニ会」（以下、オモニ会）を検討する。

オモニ会は、避妊用経口薬の普及のために1968年、全国9ヶ所の道内に16,868組のオモニ会を里・洞ごとに組織し、その会員数は194,617人に及んだ。家族計画要員とともに活動したオモニ会は、「家族計画事業」の実質的な遂行者の役割を果たすと同時に、生活改善や農家所得増大などの地域社会開発事業を行う地域婦女会の性格を持ち、全国規模の組織でありながらも農村を中心とした活発な組織活動を行った。それは、都市に比べて父系血統継承観念と男児選好思想が根強い農村部において、「家族計画事業」にいっそう力を入れる必要があったからである。オモニ会の特徴は、各町や村において「家族計画」に賛同する15人くらいの20-47歳の有配偶可妊女性たちが事業に自発的に参加し、会

長の選挙や事業の選択方式など、すべての決定を民主主義的な協議を通じて行ったところにある（家協 1991）。本会メンバーの教育程度は、小学校卒 64.4%、中卒 19.6%、高卒 4%、大卒 0.8%であった（朴亨鍾他 1974）。このように、「家族計画事業」の活動組織の推進に当たっては、オモニ会という女性団体が動員・組織され、女性たちの積極的な事業への参加や活動を促すこととともに、女性たちの意識の転換を図ったのである。

## 2. 調査研究の意義

本調査研究の意義は次のようである。

1960-70年代における「家族計画事業」を草の根的に支えた女性たちの活動の内実と意識を捉えることは、現代における韓国の女性と家族を理解する上で重要な手掛かりを与えてくれるものと思われる。しかし現状では、この点に焦点を当てた実証研究は管見の限り見当たらない。したがって、オモニ会メンバーの活動に焦点を当て、「家族計画事業」の展開過程と女性たちの生殖に対する態度の変化を追うことにより、女性たちはいかに政策に拘束され、同時に政策形成に影響を与えつつ近代家族を形成していくことになったのかを研究することは意義があると思われる。また、「近代的母親」規範を内面化する経路の解明より、現代に通ずる主婦役割、母役割が歴史的に構成されたものであることを再確認させることもできるだろう。そして現状では、1960-70年代の韓国という時代と国を限定したものであるが、今後は、日本の戦後における家族計画運動との比較も視野に入れながらさらに展開していく可能性を秘めている。

## 3. 調査対象と調査方法

### 3.1 本調査にいたる経緯

筆者は本学博士後期課程入学前から一貫して、1960-70年代における韓国の「家族計画事業」に関心をおいてきた。修士論文と D1（2010年）のときには、当時の雑誌記事を素材とするメディア分析を中心的な方法として研究を行い、その成果を『人間文化創成科学論叢』と『家族関係学』に掲載することができた。D2（2011年）のときからは、インタビュー調査を計画し実施した。歴史社会学の研究において、メディア分析と回顧法による語りデータの分析の両方を組み合わせることにより、両手法のデメリットを補いつつ複眼的な考察が可能になるからである。調査対象と研究方法については、2011年7月、韓国ソウル市永登浦区に所在する「大韓家族計画協会」（現、「人口保健福祉協会」）にメールと訪問をし、調査の趣旨を説明してインタビュー協力者の紹介を依頼した。筆者は、紹介していただいた方に本調査の趣旨を説明し、協力を依頼した。その結果、「家族計画要員」5人、「家族計画オモニ会」のメンバー4人の方から貴重な話を伺うことができた。調査時期は2011年8月と11月で、半構造化質問紙に基づくインタビュー調査を行った。このインタビュー記録をもとに論文を書き上げ、G-COE 成果論文集に掲載するようになった。今年度は、地域のオモニ会活動の実例を紹介し、分析していく予定である。具体的には「家族計画事業」のモデルとなった五柳里のオモニ会が事業を主体的に展開していくさまを描くとともに、事業の成功要因など、当時の韓国の農村の具体的な状況に注目して研究を行いたい。筆者は2012年5月に、現地の「マウル（村）会館」に訪れ、8月に実施する調査について協力いただけるという内諾を得た。8月に現地を再訪し、当時のオモニ会メンバーたちにインタビュー調査を行った。

### 3.2 調査概要

#### 3.2.1 手法

半構造化質問紙に基づくインタビュー調査。できるだけ調査対象者に自由に語ってもらうようにする。全員一対一で、時間は2～4時間である。なお、インタビュー内容は対象者の了解を得てICレコーダーで録音し、後日逐語的に情報を起こす。

#### 3.2.2 対象者

元オモニ会の会員、60-80代。

調査対象者の基本属性は、表1に示した通りである。

#### 3.2.3 調査内容

①基本属性、②「家族計画事業」への関わり、③オモニ会員として活動の実際、④1960-70年代の避妊、中絶、計画出産の状況、⑤現在から振り返ってのオモニ会員としての活動に対する評価など

#### 3.2.4 調査時期

2012年8月

#### 3.2.5 調査地域

韓国全羅北道任實郡聖壽面五柳里

### 3.2.6 地域選定理由

「家族計画」の実行状況は地域差が大きいいため、具体的な様相を知るには、地域を限定した分析が求められるからである。また、五柳里のオモニ会の活動は『家庭の友』（1968-2005）という啓発誌で成功事例として紹介されており、かつては『五柳里の女性たち』というタイトルで1974年に映画化されて「家族計画事業」に用いられることにもなったからである。そして、五柳里を地域選定した主な理由は、主婦たちが主体的に運動を展開していくさまを描くことができると考えられるためである。

表1 調査対象者基本属性

順番	区分	年齢	学歴	居住地	家族構成	主要経歴
1	M1	73歳	高卒	全州市	息子3、娘1	里の家族計画オモニ会長（1971-73） →面の家族計画オモニ会長→セマウル ル婦女会の中央会幹部→大統領表彰 →セマウル運動講師
2	M2	74歳	小学校卒	全州市 五柳里	夫、息子2、娘2	五柳里オモニ会長 （1968-71、1974-80）
3	M3	87歳	無学	五柳里	息子2、娘4	作業班長
4	M4	80歳	無学	五柳里	息子3、娘3	
5	M5	87歳	無学	五柳里	息子3、娘3	
6	M6	77歳	小学校卒	五柳里	夫、息子3、娘3	
7	M7	77歳	無学	五柳里	息子3、娘3	
8	M8	75歳	無学	五柳里	息子2、娘6	
9	M9	72歳	小学校卒	五柳里	夫、息子3、娘2	
10	M10	72歳	中学中退	五柳里	息子1、娘2	
11	M11	66歳	小学校卒	五柳里	夫、息子1、娘4	

### 3.3 五柳里とオモニ会

五柳里は、全羅北道の道庁所在地である全州市から車で約40分の距離に位置している典型的な農村地域である。世帯数は68世帯で224人の住民が生活しており、妻という名字を使う人が多い。朝鮮戦争の当時には、家門の一人が共産党に加入し、他の親族のほとんどが賦役をしなければならない立場であった。戦争後間もなく、当時の五柳里は監視対象地域に設定されたし、さらに農地がなく貧困に苦しんで村の状況はとても大変だった。こうした状況の中でも男性たちは、お酒と博打、喧嘩で惰眠をむさぼった。一方、賦役で苦勞を味わった住民たちは、みんなが集まったりして、ある組織を作るといふことさえ考えられなかった。それは、戦争中に経験した組織加入による副作用が多かったからである。そして、万が一やっていることを失敗してしまう場合、先導に立った人がすべての責任を負わなければならないことを見てきたからである。

五柳里のオモニ会は、1968年に大韓家族計画協会の傘下である全国オモニ会の組織事業方針にそって組織されたが、その組織体系については、家族計画の幹事からオモニ会組織を頼まれた里長が自分の妻を会長になってもらって、最初、10人の女性たちを集めて組織した。

## 4. 分析

### 4.1 農村社会における女性

#### ①挫折した学びの経験

学校に行けなかったんですよ。女は家庭教育が一番で教育なんかいらなくて。勉強させて嫁いで行ったら親に心配かけるっていわれました。（M2）

#### ②儒教的な慣習は男性の経済的な無力を正当化

当時、男たちは冬になると、3ヶ月以上を居酒屋でお酒を飲んで博打して遊んでいたんです。女たちはひたすら待つしかなかったんです。ご飯でも食べて遊んだらと思いました。あの時、女は旦那がご飯を食べないと出かけられなかったんですよ。（中略）息子たちに父親を連れてこいと行かせると喧嘩になるんです。口を出すなって、お前がどうしておれに対して行けとか来いとかいうのか。（M1）

### 4.2 家父長制的な家族規範の維持

#### ①旦那と姑の同意によるオモニ会活動

旦那が里長を担当したからです。当時は村で働ける人がいなかったんです。それで、はじめるよ

うになったんです。させる人もいないし、やる人もいないから。私は姑がいなかったんです。もちろん、姑から行っちゃいけないと言われてたら行かなかったでしょう。(M2)

②女性の三重労働

大変だったもんね。だから洗濯みたいなものも夜に帰ってきてからやらなきゃ。人より何倍も働かないとね。(M4)

どこかに5泊6日教育に行くと、さっさと家事をやっというて行ったんです。家をあんなにしておいて教育なんていくのっていわれるのがいやだったから。(M2)

### 4.3 オモニ会の活動

①共同作業

私は作業班長だったんです。私が夜明け4時くらいにドラを打つと、村の女たちはみんな集まったりしました。夜明けに2時間ほど48人みんなが力を合わせて田植えをしました。(M3)

②栗の木団地の造成

栗の木を山に植えて何年くらい収穫したけど、働くのが想像以上だったの。とはいえ、私たちは(会長)が言うことをよく聞いたんです。させることは指示どおりに最後まで最善を尽くした。

私たちを救う神様を仕えるみたいに何でもやりました。(M5)

③金庫の形成

私は(セマウル)教育を受けて村で最初に取り組んだのが村の金庫づくりだったんです。個々人のお金があるとちょっと頑張ると思って、各自の通帳を作って個人名義のオモニ金庫を作ろうといいました。(M1)

④生活改善環境

何でも私が先導しました。台所、物置場、食器棚を改良するときも私が指輪を出したら、みんな涙を流しながら婚約指輪や結婚指輪を出してくれました。(M2)

### 4.4 国家とオモニ会の間の中継者

①政府の指導から近代化された知識の受容

学校に通う心で政府が実施する教育を受けたんですよ。教育に参加するときはまるで子どもが遠足にいく気持ちで行ったからね。毎日が楽しみだったんです。私は1回も居眠りしたり、雑談したりしたことがないの。(M2)

②セマウル教育は学びの回復

1972年6月になってセマウル運動が展開されたんです。セマウル運動は全国で行われて韓国全体が大騒ぎになったし、官では教育を受けに来てくださいと知らせました。聞いた授業の内容は私の心を動かし、特に有名な講師たちの講義は理解のないところがいっぱいあって何でもノートに書き込んだんです。(M1)

## 5. 結語

韓国の1960年代から1970年代にかけての時期は、女性政策的動向からみると戦争被害女性を対象とした応急救護及び援護事業から指導啓蒙及び健全家庭育成を目標とした新生活運動への転換点に位置する。女性啓蒙教育活動においては、「女性の教養を高め、男性に属している隷属的地位から抜け出し、真の民主社会の一員として完全に均等な機会を得るようにする」(保健社会部1987:68)という目標の下で、農村女性を中心とした啓蒙事業が展開された。特に、政府は保健社会部(現、保健福祉部)の管轄に「婦女教室」(1967)と「家族計画オモニ会」(1968)を設立し、女性の地位及び資質向上などを図った。こうした政府の動きによって、農村女性の地位や暮らしは朝鮮戦争以前より向上したとはいえ、この時期は、次第に女性の社会参加が増えることより、女性相互間の交流と親睦の場が形成されつつある時期であった。

以下では、本調査の分析結果を要約する。

第1に、分析4.1と4.2から分かるように、当時、農村女性たちには家庭教育を重視し、男性の非経済活動は男尊女卑の封建的意識の中で容認された。また、女性に重くかかっている家事や育児などがあったとはいえ、学びに対する女性の強い意志がうかがえるとともに、封建的家父長制度下で女性たちは過重な労働を絶えるしかなかったことが読み取れる。

第2に、分析4.3が示すように、オモニ会メンバーたちは共同体意識が強く、相互協力して難題を乗り越えようとした。また、M5の発言からうかがい知れるように、オモニ会のリーダーに対して一般女性たちは強い信頼感を持っており、それは新しい村づくりにつながると信じていたからと考えられる。そして、オモニ会の活動は、女性個人の通帳作りを通じて女性の経済的な自立を促すきっかけとなった。

第3に、分析4.4から分かるように、本会メンバーの教育程度は、無学、小学校卒が多かったが、

教育活動に対する女性たちの熱意と情熱は溢れていたことがみられる。政府で行われたセマウル教育に参加した女性たちは学びに対する熱望を主体的な実践を通じて得ようとしたことが読み取れる。

最後に、オモニ会員の活動、そして当時の「家族計画事業」の影響について、述べておきたい。

韓国社会の近代的産業化過程において、道具的家族主義と其中的女性たちが遂行した性役割労働は、徹底に国家主導発展プロジェクトに動員されたと指摘され、無制限に使うことができる「自然資源」(黄정미 1999)や「補償を叶わぬ献身」(金현미 2000)とみなされている。彼女らの指摘に従えば、女性は国家の発展論理に統合される核心的な役割を果たしてきたが、この際、女性は徹底に私的なものとして扱われ、国家発展のための道具として位置づけられたといえよう。しかし反面、事業に携わった女性たちはそのことによってエンパワーされるとともに、結果としてもたらされた家計状態の改善や子どもに対する心性の変化は、その後の韓国の歴史における近代的な家族形成の契機を与えた(李 2011a・b)。すなわち、オモニ会は、国の考案のもとで活動を始めたが、家庭及び社会生活での差別を克服することができるよう、自ら力づける社会教育を行う活動であり、国家の女性に対する政策的アプローチは、女性の社会地位を改善し、その役割を変化させ、女性のエンパワーメント教育を実現させる結果をもたらしたのである。

### 【謝辞】

今回の「女性リーダーを創設する国際拠点の形成」プロジェクト「学生海外派遣」プログラムで得られた成果は、第22回日本家族社会学会大会(2012年9月16-17日、お茶の水女子大学)で発表した。現在執筆中の博士論文は1960-70年代における韓国の「家族計画事業」と女性をテーマとしているが、今回の調査結果を分析し、論文に反映させたいと考えている。インタビュー調査にあたって、御協力いただいた皆様に、この場をお借りして暑く御礼申し上げます。

### 参考文献

- 田間泰子(2006)『「近代家族」とボディ・ポリティクス』世界思想社。  
田間泰子(2001)『母性愛という制度』勁草書房。  
山田昌弘(1994)『近代家族のゆくえ—家族と愛情のパラドックス—』新曜社。  
荻野美穂(2008)『「家族計画」への道—近代日本の生殖をめぐる政治—』岩波書店。  
荻野美穂(2009)「どのようにして子どもは『つくる』ものになったのか(特殊:歴史の中の「少子化」)」『比較家族史研究』24, 9-20。  
李知淵(2011a)「韓国の『家庭の友』からみる「家族計画」—女性の主体性の観点から—」『人間文化創成科学論叢』13, 169-177。  
李知淵(2011b)「韓国における「家族計画事業」と近代家族の成立—1960-70年代における「家族計画オモニ会」を中心に—」『家族関係学』30, 167-178。  
大韓家族計画協會(1991)『家協30年史』。  
朴亨鍾他(1974)『어머니會研究』益文社。  
鄭慶均(1987)『家族計劃어머니會研究』大韓家族計劃協會。  
韓国女性開発院(1985)『女性白書』。  
保健社会部編(1987)『婦女行政四十年史』。  
黄정미(1999)「發展國家와 母性—1960-70年代 婦女政策을 中心으로—」심영희, 정진성, 윤정로(共編)『母性の談論과 現實』나남。  
金현미(2000)「韓國의 近代성과 女性の 労働權」『韓國女性學』韓國女性學會編, 16(1)。

い じよん／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 人間発達科学専攻

### 指導教員によるコメント

李さんの研究関心は一貫して、1960-70年代韓国における「家族計画事業」におかれている。戦後なお深刻な貧困と食糧問題に悩む韓国政府は、この時期に家族計画事業を推進するが、その主要な担い手は、家族計画オモニ会のメンバー、家族計画要員という地域の一般女性たちであった。彼女たちの国家の要請に従った活動は、一方で女性から性と生の自由を奪い、しかしもう一方で、彼女たちの家族役割の負担を軽減し、地域活動経験からエンパワーされるという二面性をもつものであった。当時の家族計画事業を草の根的に支えた女性たちの活動の内実と意識を捉えることは、現代における韓国の女性と家族を理解する上で重要な手掛かりを与えてくれるものと思われる。

しかし現状では、この点に焦点を当てた実証研究はほとんどない。このため李さんは、昨年度より

当時を知る生き証人ともいえる女性たち（元家族計画オモニ会メンバー、元家族計画要員）へのインタビュー調査に着手し、今回の海外調査によりさらに多くの女性たちの声を聴き取ることができた。博士論文の構想もほぼ固まり、今後はこれらの語りデータを活かしつつ、博士論文の完成に向けて着実に成果を上げてくれるものと期待している。

（お茶の水女子大学人間文化創生科学研究科（人間科学系）・藤崎 宏子）

学生海外調査研究	
ヨルダンにおける乳幼児の保育、及び子育ての現状に関する現地調査	
小山 祥子	人間発達科学専攻
期間	2012年9月17日(月)～9月26日(水)
場所	ヨルダン・ハシミテ王国
施設	幼稚園5園、乳児院1園(アンマン・マダバの公立私立幼稚園) 家庭2件(マダバ市内在住ムスリム家庭)

## 1. 海外調査研究の概要

### 1-1. 本海外調査研究の必要性

本調査研究は、中東イスラーム地域における保育と子育て状況についてその一旦を明らかにするため、研究対象国をヨルダン・ハシミテ共和国(以下、ヨルダンと表記する)とし、当国の保育に関連する基本的情報の収集、実際の保育の内容理解、及び家庭におけるインタビュー調査の事前段階として、子どもがいるムスリム家族とのラポール構築を目的として実施したものである。

本研究テーマを進めていくことは、将来的にイスラームや中東地域に対する異文化理解につながり、間接的には、保育分野の解明を通して、この地域の女性の社会的地位の向上と平和構築に対して、何らかの示唆を見出すことになるのではないかと考える。

### 1-2. 本海外調査研究の位置づけ

修士論文において、「中東イスラームの子どもの教育—シリア・アラブ共和国を事例として—」の中で、イスラーム文化における教育の成立過程を文献により検証し、シリア・アラブ共和国が近代国家として成立させてきた教育理念・制度・内容を、風土的背景・政治的背景・経済的背景から明らかにしてきた。近年のシリアでは、女性の社会進出を目的として、乳幼児に対する就学前教育の重要性が高まり、幼稚園や保育所の開設が国家をあげて進められている最中であるが、保育者の専門的養成教育や保育内容においていくつかの課題が明らかになっている。

その一方で、中東地域の幼児教育は、日本のODA援助対象国として、シリア周辺国のヨルダン・イエメン・エジプト・チュニジア・モロッコとの連携の中で活発に行われてきている。他国の援助による幼児教育において、イスラーム文化やアラブ民族意識がその背景にあることは無視できず、協力活動において保育が文化であることを認識しながら活動していくことも重要となっている。現在、シリアの保育について解明されたことは、中東地域の他の国々の協力活動にも一部影響を与えている。(現在、シリアは内戦状態のため協力活動は中断している。)

中東地域の国家は、イスラーム国家・アラブ民族国家であることは共通しているものの、それぞれの国が独立後に置かれている状況・立場は異なり、シリアの保育情報が他の中東国家において同じというわけではない。アラブ民族とイスラームの歴史に共通の流れをもつ隣国ヨルダンでさえ、統治においてはまったく異なる。特に、ほとんどのイスラーム・アラブ国家では、パレスチナとイスラエル問題から反米感情が強く米国の影響を拒む国々が多いにもかかわらず、ヨルダンはイスラエルと接し、多くのパレスチナ難民を受け入れている現状から、地域の安定のために米国から多大な援助を受け入れ、今やその援助なしには成り立たず、米国の影響は大きい。

このように、ヨルダンは地政学的にも特殊な事情を抱えているため、教育政策や実際の教育現場においても何らかの異なる状況があるのではないかと考える。実際の状況を解明していくことは大変意義深いであろう。

そのため、博士論文においては、シリアの隣国であるヨルダンにおける幼児教育の現状を明らかにすることをテーマとした。国家が管轄している保育機関を研究対象とするだけではなく、国民個人としてどのような子ども観をもちながら育てているのか、一般家庭の育児の様子にも着目しながら、ヨルダンの幼児教育について明らかにしていく。本調査研究は、その第一段階として位置づけている。

## 2. 事前研究内容

### 2-1. ヨルダンの一般概要

ヨルダンは、Hashemite Kingdom of Jordan（ヨルダン・ハシミテ王国）を正式国名とし、1946年にイギリスより独立した。現在の国家元首は1999年に即位したアブドゥッラー2世（イブン・アル・フセイン国王）であり、立憲君主制の国家である。

国土は、北海道とほぼ同じ約8万9000平方キロメートル、その8割以上は砂漠である。人口は、2010年の統計で604万人である。パレスチナ難民、イラク難民、その他の国からの移住者（昨年よりシリアからの難民は登録者だけで2万人を超えている）の増加により人口増加率は2.2%を超え、1961年より7倍以上となり、14歳以下の若年層は35%以上を占めている。全人口の7割以上をパレスチナ系住民が占め、国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）によれば、登録難民は2010年の時点で約198万人である。そのため、国民の98%がアラブ民族で、宗教はイスラームスンニー派92%、キリスト教6%、そのほかイスラームシーア派とドルーズ派が2%である。

地政学的に、北はシリア・イラク、南東にサウジアラビア、西にイスラエル・パレスチナ自治区と国境を接し、国際社会の関心や利益に多大な影響を及ぼす位置にある。アラブ諸国の中では穏健派に属し、親欧米的でもあるため、アラブ・イスラームの伝統的文化様式と西欧的文化様式の価値観の融合は、今のところ平和的に行われているという。世界銀行の基準によれば、ヨルダンは低位中所得国に分類され、水資源とエネルギー資源の確保が課題となっている。

経済的概況は、国民一人当たりのGNIは4,340ドル（2010年世銀・日本の約10分の1）、経済成長率は3.1%（2010年）、失業率は12.5%（2010年）、そのうち15歳から24歳までの若年層失業率は、27.1%と深刻な問題となっている。主要産業は、製造業、運輸・通信業、金融業で、輸出品目は、衣料品・燐鉱石・化学肥料・医薬品、輸入品目は、原油・自動車・機械類・電気機器である。2008年の世界的金融危機の影響を受け、経済成長は伸び悩んでいる。都市と地方の所得格差も深刻で、貧困率、失業率の問題を抱え、外国からの資金援助、地域の治安情勢により左右されやすい脆弱な状況である。

気候は、高地・渓谷地帯は地中海性気候、それ以外は砂漠気候で、5月から10月は乾期、雨は一滴も降らず真夏は40度を超える。11月～4月は雨期で場所により降雪があり寒暖の差が激しい。

### 2-2. ヨルダンの教育行政・教育制度

教育行政は、初等教育と中等教育を教育省が、高等教育を高等教育省が管轄している。パレスチナ難民を対象とする教育は、国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）が実施している。

公用語はアラビア語で、英語は小学校1年生から第一外国語として必須科目となっている。

学校教育制度は、初等教育6年間、中等教育4年間、高等教育として短期大学2年間、大学4年間となっている。小学校入学年齢は6歳で、12月31日までに満6歳になる児童は、翌年9月1日に小学校1年生に入学する。学校年度は9月4日から6月19日までで、2学期制をとっている。1学期は9月4日から1月11日まで、2学期は2月6日から6月19日までである。金曜日と土曜日は休校日となっている。

法律上、規定されている義務教育の就学期間は、満6歳～16歳までの10年間で、2012年3月時点、義務教育就学率は98%を超えている。この間の学費は無料であるが、1年間の教科書代（1年生～6年生は3.15JD、7年生～10年生は4.15JD、11年生～12年生は6.15JD、1JD＝約110円）を支払うことになっている。最終学年の12年次にはタウジーヒと呼ばれる全国一斉検定試験があり、その結果によって進学先が決まる。

義務教育の設立機関は、国立59%、私立38%、UNRWA 3%の割合で運営されており、高等教育機関は国立と私立があり、近年は海外留学生も多くなっている。

就学前教育は義務ではないが、4歳～6歳を対象として公立・私立・UNRWAが運営している。

### 2-3. ヨルダンにおける日本ODA援助動向

日本は、中東地域の和平プロセスの重要性から、技術協力、無償資金協力、円借款など、さまざまな形態により経済支援を実施してきている。中東地域における2国間援助累計額では、エジプトに次いで第二位の被援助国である。2010年度まで、有償資金協力は約2044億円、無償資金協力659億円、技術協力297億円となっている。ヨルダンの主要援助国は、2009年時、第1位米国、2位フランス、3位EU、4位日本、5位ドイツである。

日本政府は、1954年に国交を樹立して以来、皇室と王室間の友好関係を深め、現在も良好な関係にあり、国王は訪日歴10回の親日家といわれている。文化交流としては、アニメが若者に人気があり、その他、武道・日本食・伝統芸能などの日本文化への関心は高く、ヨルダン国内においては日本文化紹介事業や日本語弁論大会が実施されている。

幼児教育分野における援助は、1997年に開始されて以来、2012年6月まで計23名の保育士・幼稚園教諭が派遣され、日本の保育技術による支援活動が行われている。

### 3. 実地調査報告

#### 3-1. 調査日程と主な視察先

日程	場所	内容	目的
2012/9/17 Mon	成田	移動【EK319】ドバイ経由【EK901】 (22:00成田発 時差-7h)	
2012/9/18 Tue	アンマン	午前/JICAアンマン事務所挨拶 午後/準備作業	調査協力依頼
2012/9/19 Wed	アンマン	実地視察(乳児院/UNRWA内幼稚園) 青年海外協力隊員インタビュー	児童福祉施設における保育情報収集
2012/9/20 Thu	アンマン	実地視察(公立幼稚園/私立幼稚園) 青年海外協力隊員インタビュー	都市部の幼児教育の実施状況把握
2012/9/21 Fri	ペトラ	午前/移動 午後/遊牧民視察	遊牧民の生活観察と情報収集
2012/9/22 Sat	ペトラ	午前/遊牧民視察 午後/移動	遊牧民の生活観察と情報収集
2012/9/23 Sun	マダバ	午前/実地視察(郊外公立幼稚園) 午後/ムスリム家庭訪問・青年海外協力隊員インタビュー	地方郊外にある幼稚園の実施状況把握 ムスリム家庭挨拶
2012/9/24 Mon	マダバ	午前/実地視察(市内公立幼稚園) 午後/ムスリム家庭訪問(パレスチナ難民キャンプ地内居住)	地方都市の幼稚園の実施状況把握 ムスリム家庭挨拶
2012/9/25 Tue	アンマン	午前/移動・教育省訪問・JICA事務所挨拶・帰国準備 午後/移動	教育関係資料収集 関係者へのお礼挨拶
2012/9/26 Wed	アンマン 成田	移動【EK904】(17:15発) ドバイ経由【EK318】(17:35成田着)	帰国

#### 3-2. 視察先都市の概要

##### 3-2-1. アンマン

アンマンは、およそ9千年前に作られたとされ、以来さまざまな勢力の興亡により繁栄と衰退を繰り返してきた。1929年にオスマン帝国からトランス・ヨルダンとして独立した際に首都となり、その後の度重なる中東戦争とイスラエル建国により、多くのパレスチナ人が流入したため人口が急激に増加し、市内各地にパレスチナ難民キャンプができています。1980年代にはレバノン内戦からの避難民、1990年からの湾岸戦争や2003年からのイラク戦争による避難民、そして現在のシリア内戦により、避難民が流入し、常に不安定な状況にある。

地形としては、ヨルダン川東岸から隆起した山地とアラビア半島方向へ続く土漠の境目にあることから、降雨によって多くの丘が築かれ、起伏の多い街となっている。市内はダウントウンを中心に丘の稜線に沿って幹線道路が四方に伸び、官庁・文化施設・商業地区・高級住宅地区・アルメニア人地区・パレスチナ難民地区など特徴的な街並みが広がっている。

##### 3-2-2. マダバ

アンマンから南へ約30kmに位置する宗教上意味深い町である。モーゼの脱エジプトに際し、「約束の地」と指さしたネボ山、イエスが洗礼を受けたとされるバプティズム・サイト、市内には殉教者教会、聖ジョージ教会、聖処女教会、12使徒教会など多くのキリスト教やユダヤ教にまつわる建物がある。かつて、アフリカ大陸から連れてこられた奴隷が住んでいた地ともされ、マダバ郊外の村には肌の色が異なる住民が多い。

##### 3-2-3. ペトラ

アンマンから南へ約235km下ったところにあるナバタイ人がつくったとされる古代都市である。2000年以上前からベドウィン(遊牧民)やナバタイ人によって栄え、一時秘境としてベドウィンによって隠されていたが、スイス人探検家ヨハン・ルートヴィッヒ・ブルクハルトが発見して以来、ペトラ遺跡として知られ、現在はユネスコ世界遺産となっている。岩肌をくりぬいて築いた建造物は圧巻で、周辺には今も多くベドウィンが住んでいる地域である。

#### 3-3. 視察先の幼稚園・乳児院の状況

##### 3-3-1. シメサーニ幼稚園(アンマン市内公立幼稚園)

女子小学校の一角にある幼児クラスである。教室は、幼児向けの円卓と椅子が並び、壁にそって遊び

のコーナーも作られている。視察時、丸くなって出席確認が行われていた。そのあと「五感と五官」をテーマとした授業が始まり、塩、砂糖、レモンなどの実物を使って実際に嘗めて味を確認しながら、しょっぱい、あまい、すっぱいなどのアラビア語を学んでいた。その後、粘土遊びや描画活動など教師の指示する遊びを行い、午前中の中食の時間となっていた。

### 3-3-2. ワッハベヒ タマーリ幼稚園（アンマン市内私立幼稚園）

キリスト教系の私立幼稚園である。1995年に設立され、現在365名の園児が在籍する幼稚園である。年間の保育料は1800JDで、宗教や民族を問わずだれでも入園可能ということであるが、明らかに高所得者と思われる園児が通っている。5歳児のみ10クラス、1クラス35名定員で、担任教師もいるが、それ以外に体操教師、アラビア語教師、英語教師、パソコン教師など各専門分野の教員を配置し、時間割に沿って授業が行われている。備品、物品ともに完璧と思われるほど恵まれている環境にある幼稚園である。

### 3-3-3. ヒッティーン難民キャンプ幼稚園（アンマン市郊外パレスチナ難民救済事業機構管轄）

パレスチナ難民居住地区内にある幼稚園である。5才児8クラス、4歳児1クラス（1クラス35名定員）、教員10名で運営されている。園長先生は2007年来日し、JICAの幼児教育研修を受けている。5才児はアラビア語、英語、算数を中心とした時間割が組まれ、幼稚園児向けのワークブックを使用し授業が行われている。担任は、一人ひとりに手書きで文字や数字の書き取りの宿題を毎日出すことが課されており、その間、幼児は静かに待っているか、担任が指定する遊びをしている。保育室には、幼児用の机と椅子、遊具が整備されている。

副園長の話によれば、担任は、出席表による出欠確認と保育日誌を毎日書くよう義務付けられているとのことで、先月アンマン市教育局の監査により、階段の危険性を指摘され、監視カメラを設置することで幼稚園施設として認可されたという。

### 3-3-4. ハッタビエ幼稚園（マダバ市郊外公立幼稚園）

女子学校（小学3年生～10年生）の一教室に設置された幼稚園である。5歳～6歳の男児と女児計25名が在籍する。担当教師は女性教師1名、保育時間は午前7：00～12：30で、8：00の朝礼時には全園児が登園し、アラビア語、算数、英語、クルアーンの授業が行われている。視察時、英語のアルファベットの貼り絵や粘土を使用して文字指導が行われていた。保育室内には幼児用パソコンが一台備えられ、DVDを使用してアラビア語フスハ（共通語）を学んだり、音楽を聴いて表現遊びをしたりしている。外からアザーン（お祈りの呼びかけ）が流れてくると、園児たちは自ら別室に行き、クルアーンを唱えて祈り始める姿が見られた。

### 3-3-5. アッサシーエ幼稚園（マダバ市内公立幼稚園）

マダバ市中心部に立地し、2011年9月に新設されたばかりの新しい学校施設で、女子学校（小学3年生～6年生）の中に2クラスの幼児クラスが開設されている。担任教師は私立幼稚園10年の経験を持ち、本人は制作が得意ということである。視察時、園児たちは円形に集まり、クルアーンの復唱、出席確認、今日の日付、天気などの内容を含む朝の会を行っていた。その後、アラビア文字の授業となり、本日学ぶ文字を指でなぞり、読みや文字カードを使って何度か復唱し、最後に文字探しゲームを行い、子どもたちも楽しそうに学んでいた。9月からシリア難民の園児が数名入園したとのことである。アラビア語のアンミーヤ（方言）は、シリアとヨルダンに似ているため、それほどの障害もなく溶け込んでいるという。

### 3-3-6. アル・フセイン乳児院（アンマン市内王立施設）

若年出産、虐待、犯罪等の理由により養育できない保護者にかわって、0歳から5歳までの乳幼児を養育している。施設、備品、遊具すべて国からの援助で整備され、乳児3名に対し保育士1名の対応で人員配置されている。視察時、幼児は隣接されている幼稚園に通園のため不在、施設内には0歳～3歳までの乳幼児が保育士の世話を受けながら過ごしていた。生後2週間～3か月以内の乳児は、一人一つのベッドにスウォドリングの姿で寝ていた。おむつはすべて紙おむつを使用、粉ミルク等も豊富にそろえられている。保育士の一人は、「アブドゥッラー国王とラーニア女王のおかげで、この子どもたちは元気に育っている。国王一家も時々ここへ足を運んで見に来てくれる」と王族を褒め称えていた。国王には、フセイン王子（1994年生）、イマーン王女（1996年生）、サルマ王女（2000年生）、ハーシム王子（2005年生）の4人の子どもがおり、入口には一家の写真が掲げられている。国王の写真は、どこの保育施設の中でも掲げられていた。

## 4. 所見と今後の課題

ヨルダンの保育関連施設の視察によって明らかになったことの一つに、幼稚園は就学前の教育の場として位置づけられていることである。どの園も時間割に従って、アラビア文字や数字、英語、算数の授業が行われていた。二点目は、資金と物品の双方において米国による援助が多であったということである。

ある。どこの施設においても、「US AID」の表示があり、米国の影響力が強いことは明らかである。園によって、教材や遊具の量に多少の違いは見られるが、概ね物的環境はそろっている。三点目は、人的環境についてである。シリアもそうであったがヨルダンにおいても保育職を担うのは女性であった。女性が働く貴重な場として認識されていることもわかった。筆者が一女性研究者として、イスラームの女性社会に入りやすいことも実感した。

一方、本調査においては、現地JICA事務所の担当職員、及び現地の協力隊員に情報提供の協力を仰ぎ、貴重な資料の提供と現地視察を実施することができたが、それらの資料だけでは保育の解明は困難であることがわかった。教育省での情報収集も試みたが、期間内の調査では必要な資料を入手することはできなかった。最新かつ客観的情報の入手が課題であるが、教育省幼児教育部の担当者は来日経験もあり、最終日に今後につながる再会ができたことは大変心強い。子どものいる一般家庭への訪問は、協力隊の紹介により2件に訪問させていただき、家庭における両親と子どもの様子を垣間見、興味深い手ごたえを感じているが、特定の家庭における調査がどこまで可能であるのか、難しい側面があることもわかり、再度検討していく必要性を感じている。

今後は、本調査で入手した保育関連施設の情報を整理し、関連文書を翻訳した上で、明らかになったことを順次、保育学会、国際幼児教育学会、比較教育学会等で公表していく予定である。

### 【謝辞】

本調査に対し、お茶の水女子大学大学院の学生海外調査研究として採択していただき、ご支援をいただいたことに審査員およびスタッフの方々へ感謝申し上げます。また隣国シリアの情勢が悪化していく中で、常に最新情報を寄せてくださり、調査にご理解とご協力をいただいたヨルダンJICA事務所の職員と協力隊員、そして現地ヨルダン側関係者の皆様には、感謝の限りです。何よりも安全に調査が実施できたことも現地の人のおかげに尽きます。国内においては、いつも心強い励ましと研究への道筋を立ててくださる指導教官小玉亮子先生に心より感謝申し上げます。

### 【参考文献】

- Tmim Ansary, (2009) *Destiny Disrupted*, Public Affairs. (小沢千重子訳 2011『イスラームからみた「世界史」』紀伊国屋書店)
- 立山良司(2002)「国際情勢ベーシックシリーズ③中東第3版」自由国民社
- 加納弘勝(1992)「中東イスラーム世界の社会学—第三世界における都市と文化と社会統合」有信堂高文社
- 日本国外務省 <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/jordan/> 2012.5 現在 (2012/10/22)
- 国際協力機構(JICA) <http://www.jica.go.jp/jordan/index.html>, (2012/10/22)
- <http://www.jica.go.jp/jordan/office/others/situation.html> (2012/10/22)
- 国連難民高等弁務官 UNHCR 協会 [http://www.japanforunhcr.org/act/a\\_mena\\_syria\\_2012](http://www.japanforunhcr.org/act/a_mena_syria_2012) (2012/10/22)
- 国際交流基金 <http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/country/2011/jordan.html> (2012/10/22)
- UNRWA (国連パレスチナ難民救済事業機関) <http://www.unrwa.org/etemplate.php?id=66> (2012/10/22)
- The World Bank (世界銀行) <http://data.worldbank.org/indicator/NY.GNP.PCAP.CD> (2012/10/22)

こやま しょうこ／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 人間発達科学専攻

### 指導教員によるコメント

小山氏の今回のヨルダンにおける幼児教育に関する調査は、短期間でありながら、精力的に現地視察をした非常に貴重なものであり、今後の研究にとって大きな収穫を得たものであることが伺える。現状の中東地域の状況、特にシリアとその周辺諸国における政治的・社会的情勢は困難な状況下にあるが、そのような中、安全が確認されているとはいえ、シリアの隣国ヨルダンでの調査を許可して下さった審査員の皆様に心からお礼を申し上げたいとおもう。

日本において、ともすれば、中東の状況や中東で生きる女性や子どもの生活は遠いものとしてとらえられがちであるが、しかしながら、今日、中東を理解せずには、グローバルな問題は考えられないのは自明のことである。そのような中であって、お茶の水女子大学はアフガニスタンをはじめ、途上国やアラブ地域に積極的に調査・研究・協力を行ってきた。小山さんの研究は、まさにこの一翼を担うものとして、その成果が期待される。

(お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 (人間科学系)・小玉 亮子)

学生海外調査研究	
脂質ベシクル形態変化機構の解明；実験,シミュレーションによる双方向的アプローチ	
坂下 あい	理学専攻
期間	2012年11月4日～2012年11月23日
場所	Ljubljana, Slovenia
施設	Jozef Stefan Institute/ University of Ljubljana

## 内容報告

### 1. 海外調査研究の目的と必然性

#### 1.1 研究背景

我々生物の身体は適度な柔軟性と伸縮性を持ち合わせているため、目的に応じて様々な形状を取ることが可能である。このような現象は細胞レベルでも起こっており、とりわけ赤血球はその優れた変形能から得られる形状は多岐に渡る[1]。物理学の分野ではその形状決定機構の解明を目指し研究が行われてきた。

先行研究で細胞の膜形状は脂質分子が担っていることが明らかにされたため、実験には脂質二分子膜から成る小胞（ベシクル）が用いられる。ベシクルは周囲の環境を変化させることで赤血球に見られる様々な形状を再現し[2, 3]、その形状は Area-difference-elasticity (ADE) model で定量化が可能だとされている[4]。しかし当時の顕微鏡技術の問題からモデル検証は行われず、生体膜研究は行き詰まっていた。

申請者はこの停滞状況を打破するために、近年開発された高速共焦点レーザー顕微鏡を実験に導入しベシクルの三次元画像を取得し、独自に開発した三次元画像解析法で形状を定量化、ADE モデルの検証を行った。その結果世界に先駆けて、従来困難とされていた非軸対称形状を含むほぼ全形状の比較に成功しており、変形過程を定量化した結果から ADE モデルの有用性の立証に成功した。この結果は業界の一流誌である *Soft Matter* に掲載され、得られた結果のビジュアル性の高さから同誌の表紙にも採用された[5]。

現在は本手法をより生態系に近い多重膜ベシクル（マルチラメラベシクル）に適用することでミトコンドリアを始めとした生体内に見られる複雑な形状の決定機構の解明を明らかにする。この手の研究は前例が極めて少ないため[6]、論文が完成した際の業界におけるインパクトは大きいことが予想される。

準備状況としては、既に実験的にマルチラメラベシクルの撮影に成功した。一方で従来の三次元画像解析法のこの系への適応が難しいため、シミュレーション手法に新たに動的三角格子モデル[7]を導入し形状の再現を行った。今回は特に外殻が球のマルチラメラベシクルに注目し、その形状変化を追った。詳細は後述の調査研究の項目で説明する。

#### 1.2 目的,課題

研究調査の目的は、これまでに得られた実験及びシミュレーション結果を議論し、理論及び論文作成の足がかりを作成することである。具体的には以下の四点について研究を行う。

- 1) 撮影した実験結果を元に、形状変化の特徴・特殊性を議論する。
- 2) 得られたシミュレーション結果から外殻の及ぼす影響を定量化する。
- 3) 1, 2 を元に論文を作成できるよう、結果、考察部分の大筋を議論する。
- 4) さらに可能であれば結果をモデル化し、生体系へ還元する方法を議論する。

#### 1.3 施設の選定

今回取り扱っているマルチラメラベシクルは先行研究がほとんど存在しない未開拓な対象である[4]。そのため結果を考察するにあたって適切な意見をいただくために、ベシクルの基礎理論に精通している研究者と議論する必要がある。P. Zihel博士<sup>1</sup>と S. Svetina博士<sup>2</sup>はこの系の理論及び実験の先駆者であり申請者も過去に議論した経験があるため、課題を解決するにあたり有効な議論を行うことが出来ることを見込み、派遣先に選んだ。

## 1.4 本研究の意義

本研究の独創的な点は、従来取扱が困難とされてきたマルチラメラベシクルの形状に注目して研究を進めている点である。マルチラメラベシクルとは先に述べたように小胞に複数の小胞が内包されたモデル生体膜であり、その形状決定機構の解明は生体内に見られる細胞のその解明に繋がる。本研究では実験に最新式の共焦点高速レーザー顕微鏡を用い、シミュレーションには本分野において非常に独創的で画期的な動的三角格子モデル[7]を導入することで、現象の解明を目指した。今回の調査研究で得られた結果の理論化に成功した暁には、ミトコンドリアを始めとしたより複雑な細胞の形状決定機構の議論が可能になるため、物理学の分野に置ける生体膜研究が飛躍的に向上する成果が期待される。

## 2. 得られた成果と今後の方針

### 2.1 調査研究

この節では、滞在期間中に行った議論及び活動について報告する。事前に予定していた議論に加え、幸運にも多くの研究者の方と議論する機会を得ることが出来た。

#### 2.1.1 P. Zihlerl 博士（滞在期間：11/5～11/22）

事前にメールや Skype を利用して入念に研究打ち合わせを行っていたため、現地に到着後スムーズにモデル作成に移ることができた。具体的には、以下の内容で研究を進めた。

11/5-11/9

事前に得られた実験及びシミュレーション結果を元にそれぞれの形状の特徴をまとめ、カテゴリー分けを行うことで理論モデル作成の足がかりを作成した。週の後半では簡単な理論モデルの作成に着手した。

11/12-11/16

第一週目に作成した理論モデルがうまく機能しなかったため原因を究明した。具体的にはそれぞれの形状で得られるエネルギーの内訳を確認し、形状を決定する際に最も影響の大きいものを選定しモデルに反映させた。

11/19-11/21

第二週目の修正によりモデル作成の見通しがたった。また、平行して12月5日に京都で開催される国際会議（2.2, 1 参照）に向けてポスターを作成しつつ、論文の構想を練った。今回得られた結果の全ては論文として発表予定であるため本報告書では記述を避けさせていただきます、何卒ご了承ください。

#### 2.1.2 S. Svetina 博士（訪問：11/12）

S. Svetina 博士はベシクル実験の権威であられるため、University of Ljubljana へ訪問し議論を行った。当日は本研究の実験部分に対するコメントに加えて、同様の系を取り扱っている他の研究者の情報も頂くことができた。

#### 2.1.3 J. Derganc 博士<sup>3</sup>, S. Vrhovec 氏<sup>4</sup>（訪問：11/12）

J. Derganc 博士と S. Vrhovec 氏は申請者が今年の9月に参加した国際会議(PhysCell2012<sup>5</sup>)で知り合った研究者である。幸いにも彼らは申請者の共同研究者である P. Zihlerl 博士の知り合いであり、上述の S. Svetina 博士がおられる University of Ljubljana に所属されているため、現地についてからコンタクトを取り議論及び研究室見学を行った。彼らは実験家であり、我々同様ベシクルを取り扱っているが、サンプルの作成方法や観察環境が非常に合理的なものであるため[8]、非常に有意義な訪問となった。

#### 2.1.4 A. Šiber<sup>6</sup> 博士（滞在：11/19～11/21）

博士は P. Zihlerl 博士の知人であり物理学者である一方で、趣味で CG を用いてイラストを作成されるイラストレーターでもある。申請者の論文[5]が SoftMatter 誌の表紙の候補に挙がった際に、図の作成を担当して下さった経緯があり、運良く滞在期間中に Jozef Stefan Institute に滞在されていたため、本研究で得られた結果の魅せ方について相談に乗っていただいた。また研究結果についても議論させていただき、今後もアドバイスをいただける予定である。

#### 2.1.5 セミナー、議論

前述の議論に加えて、訪問中に申請者の従来の研究及び現行の研究について所内でセミナーを行う機会をいただいた。

1. 2012/11/12 University of Ljubljana

2. 2012/11/21 Jozef Stefan Institute

### 2.2 用いた理論モデル、シミュレーションについて

研究成果の詳細は論文執筆中のため掲載できないので、ここでは使用した理論及びシミュレーションモデルの詳細、独自性について紹介する。

### 2.2.1 理論モデルの変遷

ベシクルの形状を記述するモデルの考え方の一つに、脂質二分子膜の曲率を基礎にした弾性モデルがある。任意の曲面は任意の点における二つの基本的な曲率、すなわち平均曲率とガウス曲率によって記述することができる。この二つの曲率は主曲率  $C_1=1/R_1$  と  $C_2=1/R_2$  によって定義され、ここでの  $R_1$  と  $R_2$  は主曲率半径である。したがって平均曲率とガウス曲率はそれぞれ以下のように定義される。

$$H = \frac{1}{2}(C_1 + C_2), \quad K = C_1 C_2 \quad (1)$$

曲率を用いた膜形状の定量化は 1970 年の Canham による Minimal model が始まりであり、一般的に  $(1/R_1^2 + 1/R_2^2) = (2H)^2 - 2K$  から局所エネルギー  $f \equiv (\kappa/2)(2H)^2 + \kappa_G$  を導いた。 $\kappa$  と  $\kappa_G$  はそれぞれ平均曲率とガウス曲率に対する弾性係数である。これを膜表面全体で積分することで以下の膜の自由エネルギーを得る。

$$F_{CV} \equiv \frac{\kappa}{2} \oint (2H)^2 dA + \kappa_G \oint K dA \quad (2)$$

このモデルを元に 1983 年に S. Svetina らが二分子膜の内膜と外膜の面積差  $\Delta A$  の制約を加えた bilayer-couple model (BC model) を提案した。

$$\delta F' \equiv \delta(F_{CV} + \Sigma' A + PV + Q \Delta A) = 0 \quad (3)$$

$\Sigma'$ ,  $P$ ,  $Q$  はそれぞれ表面積、体積、面積差を一定にするためのラグランジュの未定常数である。この方程式から導かれるベシクルの形状は以下の換算体積  $v$  と面積差  $\Delta a$  で定義される。

$$v \equiv \frac{V}{4\pi R_0^3/3}, \quad \Delta a \equiv \frac{\Delta A}{8\pi h R_0} \quad (4)$$

ここで  $V$  はベシクルの体積、 $R_0$  は今考えているベシクルと同じ表面積  $A$  を持つ球の半径 ( $R_0 \equiv (A/4\pi)^{1/2}$ )、 $h$  は二分子膜の膜間距離の 1/2 であり、 $v$ ,  $\Delta a$  は共に球で規格化されている。

### 2.2.2 Area-difference-elasticity model (ADE model)

今回用いた Area-difference-elasticity model は現在最も実験とよく一致するとされているモデルである。このモデルは先の BC model を発展させた系であるが、面積差の制約を外し、代わりにその影響をエネルギーのペナルティとして膜の弾性エネルギーに加えることで、膜の伸縮を可能にした。これにより面積差は一定でなくなるため、先の  $\Delta A$  (これは膜の伸縮により変化する) に加えてベシクル固有の面積差  $\Delta A_0$  が次のように定義される。

$$\Delta A_0 = (N^+ - N^-) a_0 \quad (5)$$

ここで  $N^+$ ,  $N^-$  はそれぞれ外膜、内膜を構成する分子の数、 $a_0$  は脂質分子一個あたりの断面積である。したがって膜の弾性エネルギーは以下のように定義される。

$$F_{ADE} \equiv F_{CV} + \frac{\alpha\pi}{8Ah^2} (\Delta A - \Delta A_0)^2 \quad (6)$$

膜の伸縮によるペナルティは第二項に示され、 $\alpha$  は膜を構成する脂質分子に寄って変わる定数である (今回用いた不飽和リン脂質 DOPC では 2~3 の値をとる)。これが最小になる条件で形状は決定する。

$$\delta F'' \equiv \delta(F_{ADE} + \Sigma' A + PV) = 0 \quad (7)$$

得られた換算体積  $v$  と面積差  $\Delta a_0$  で定義される (図 1)。

$$v \equiv \frac{V}{4\pi R_0^3/3}, \quad \Delta a_0 \equiv \frac{\Delta A_0}{8\pi h R_0} \quad (8)$$

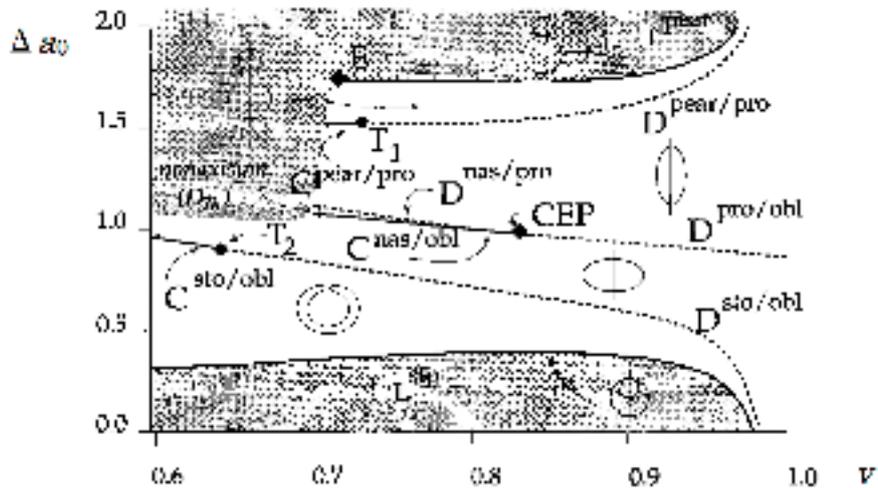


図 1. ADE model で得られる相図[9]

### 2.2.3 シミュレーション：先行研究

一方膜形状のシミュレーションも盛んに行われてきた。見たい現象のスケールに合わせてシミュレーションモデルも様々であるが、ベシクルの形状や変形に焦点を当てた場合、そのスケールは  $\mu\text{m}$  オーダーであるため一般的に膜を三角格子状のメッシュで粗視化して考える (図 2 下段)。シミュレーションに用いるプログラムは配布されているものと自作のものとの主に二通り存在するが、ここでは本分野で一般的に用いられている **Surface Evolver**[10]について触れる。

**Surface Evolver** は K. Brakke により 1992 年に発表されたフリーソフトであり、ベシクルを始めとした膜形状 (他にも液滴やシャボン玉等も記述できる) の数値計算を得意としているため、現在まで多くの理論研究家に利用されている。ベシクルを取り扱う際には、先に触れた **BC model** の膜の自由エネルギーが最小化されるよう形状が決定され (数式(3)), 得られた形状は換算体積  $v$  と面積差  $\Delta a$  で定義される (数式(4))。この手法は **ADE model** にも応用可能であり、理論で予測される形状の多くを三次元的に描写することができる (図 2)。

しかしながらこの手法の問題点として、膜の弾性エネルギーのみを考慮しているため、図 2(d)のような膜が接触しそうな場合に膜が反発できず、互いに通り抜けてしまうことが挙げられる。今回申請者が考えるマルチラメラベシクルは、外側のベシクルと内側のベシクルが非常に近くに存在することで変形に影響を及ぼしているため、**Surface Evolver** での取扱は困難であった。

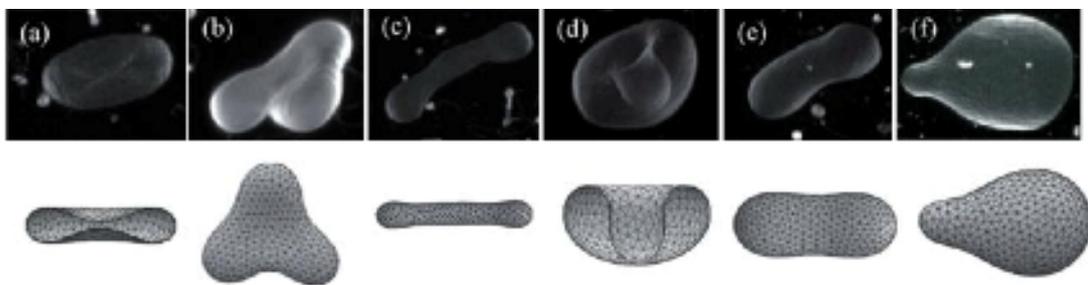


図 2. 実験結果 (上) と Surface Evolver で作成した理論形状 (下) [5]

### 2.2.4 シミュレーション：動的三角格子モデル

この問題を解決できる手法の一つに動的三角格子モデルである。これは現在特別研究派遣学生として指導を仰いでいる東京大学物性研究所野口博司准教授が赤血球等に応用している手法である。このモデルの特徴は、先に触れた ADE model をシミュレーションに取り入れている点に加えて、膜に熱揺らぎを考慮している点である。

このモデルにおいて膜のポテンシャルエネルギーは次のように与えられる。

$$U = U_{CV} + U_{ADE} + U_{bond} + U_{rep} + U_A + U_V \quad (9)$$

ここで  $U_{CV}$ ,  $U_{ADE}$  は先に紹介した膜の弾性エネルギーを意味している。続く  $U_{bond}$ ,  $U_{rep}$  は膜を構成する粒子間の引力、斥力相互作用である。まず  $U_{bond}$  についてだが、 $i$  番目の粒子と  $j$  番目の粒子の粒子間距離が  $r_{i,j}$  で表される場合、粒子間距離の最大値を  $l_{max}$ 、カットオフを  $l_{c0}$  とすると、引力相互作用は以下のよう

$$U_{bond}(r_{i,j}) = \begin{cases} \frac{b \exp[1/(l_{c0}-r_{i,j})]}{l_{max}-r_{i,j}} & (r_{i,j} > l_{c0}), \\ 0 & (r_{i,j} \leq l_{c0}), \end{cases} \quad (10)$$

同様にして斥力相互作用も粒子間距離の最小値を  $l_{min}$ 、カットオフを  $l_{c1}$  として以下のように表される。

$$U_{rep}(r_{i,j}) = \begin{cases} \frac{b \exp[1/(r_{i,j}-l_{c1})]}{r_{i,j}-l_{min}} & (r_{i,j} < l_{c1}), \\ 0 & (r_{i,j} \geq l_{c1}). \end{cases} \quad (11)$$

このポテンシャルにより膜が互いにすり抜けることなく、変形が行われる。一方  $U_A$  と  $U_V$  はそれぞれベシクルの表面積と体積を一定に保つためのポテンシャルであり、以下の式で与えられる。

$$U_A = \frac{1}{2} k_A (A - A_0)^2 \quad (12)$$

$$U_V = \frac{1}{2} k_V (V - V_0)^2 \quad (13)$$

ここで  $A$ ,  $V$  は設定している表面積、体積であり、 $A_0$ ,  $V_0$  は実際の値であり、この二つが一致していない場合ペナルティとしてポテンシャルエネルギーが発生する。 $k_A$ ,  $k_V$  はこれに対する比例定数で、今回は  $k_s=1.0$ ,  $k_v=0.5$  を用いた。

これらのポテンシャルの効果により、本手法では従来取り扱いが困難とされていた、膜同士が近接する系での変形シミュレーションを実現している。また、膜の周囲に溶媒を配置することで、流れ場における変形の再現にも成功しており、現存の手法において最も生体系に近い状況を再現できる優れた手法である (図 3)。

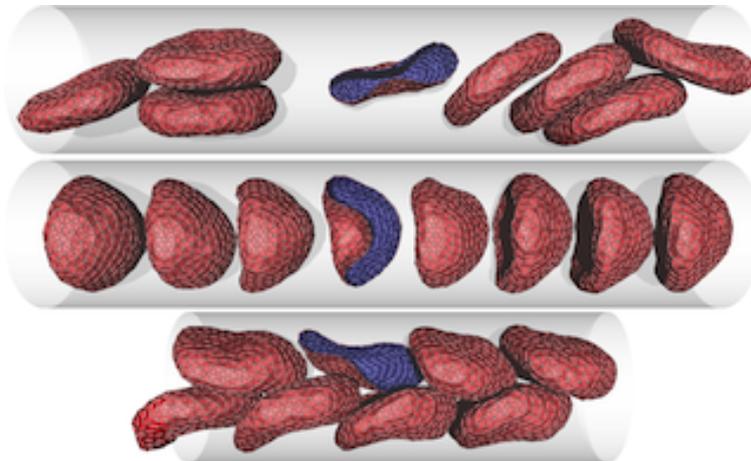


図 3. 細管を流れる赤血球型ベシクルのシミュレーション[11]

### 2.3 今後の方針

得られた結果は早急に論文にまとめ、来年度までの投稿を目指す。また現在の研究は今後外側のベシクルを非球形のベシクルに変えてより生体系へ近い形状の再現へとシフトさせる予定であるため、今回作成したモデルはそちらにも応用する予定である。最終的には学位論文に全結果を掲載する。

また得られた成果は以下の学会で発表を計画している。

1. ○A. Sakashita, P. Zihlerl, M. Imai and H. Noguchi, 「Compartmentalization by confinement of multi lamellar vesicles」 文部科学省科学研究費補助金 新学術領域研究 揺らぎが機能を決める生物分子の科学 第六回公開国際シンポジウム,2012年12月5日,京都 (poster presentation)
2. A. Sakashita, ○P. Zihlerl, M. Imai and H. Noguchi, 「Confinement-induced compartmentalization of vesicles」 7<sup>th</sup> Christmas Biophysics Workshop, December 17-18, Austria (oral presentation)
3. ○坂下あい, Primoz Zihlerl, 今井正幸, 野口博司 「球状ベシクルに内包されたベシクルの形状決定機構の解明」 第68回年次大会,2013年3月26-29日,広島 (口頭発表)

### 3. 謝辞

この度はお茶の水女子大学文部科学省特別経費「女性リーダーを創出する国際拠点の形成」プロジェクト「学生海外派遣」プログラムの派遣生として採用していただき、誠にありがとうございました。おかげさまで、当初予定していた Zihlerl 博士, Svetina 博士と実りある議論を行うことができ、論文作成の上でのアウトラインを作成することができました。また、今回の滞在では積極的に現地の研究者の方々とコンタクトを取ることで、自身の研究の議論に加えて研究室見学やショートセミナーの機会等、当初期待していた以上の成果を得ることができました。この場を借りて、深く御礼申し上げます。

今後は得られた結果を元に論文を執筆するとともに、成果を積極的に国際会議の場で報告していくことで、日本を代表する若手研究者として女性リーダーを目指していきたいと思います。この度は誠にありがとうございました。

### 注

1. Associate professor, Faculty of Mathematics and Physics, University of Ljubljana/ Jožef Stefan Institute
2. Professor, Institute of Biophysics/ Faculty of Medicine, University of Ljubljana
3. Asistant, Institut of Biophysics/ Faculty of Medicine, University of Ljubljana
4. Ph.D. student of Institute of Biophysics/ Faculty of Medicine, University of Ljubljana
5. PhysCell2012 official site: <http://www.physcell2012.com/home>
6. Science advisor, Institute of physics, Zagreb, Croatia.

### 参考文献

- M. Wortis, from *Soft Matter* edited by G. Gompper and M. Schick, Vol. 4 (Wiley, New York, 2007)
- H. Hotani, *J. Mol. Biol* **178**, 113 (1984).
- M. Yanagisawa, M. Imai, and T. Taniguchi, *Phys. Rev. Lett.* **100**, 148102 (2008).
- S. Svetina and B. Žekš, *Eur. Biophys. J* **17**, 101 (1989).
- A. Sakashita, N. Urakami, P. Zihlerl, and M. Imai, *Soft Matter*, **8**, 8525 (2012).
- O. Kahraman, N. Stoop, and M. M. Müller, *New J. Phys.* **14**, 095021 (2012).
- H. Noguchi and G. Gompper, *Phys. Rev. E* **72**, 011901 (2005).
- S. Vrhovec, M. Mally, B. Kavčič, and J. Derganc, *Lab on a Chip* **11**, 4200 (2011).
- U. Seifert, *Advances in Physics* **46**, 13 (1997).
- K. Brakke, *Exp. Math.* **1**, 141 (1992); the software package is available free of charge at <http://www.susqu.edu/brake/evolver/evolver.html>
- 野口博司, 「赤血球, 脂質小胞の流動ダイナミクス」 日本物理学会誌, **65(6)**, 429 (2010).

さかした あい／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 理学専攻

### 指導教員によるコメント

坂下さんは修士1年生の時から Primoz Zihelr 博士との共同研究を行っており, Jozef Stefan Institute への訪問も今回で 4 度目となる。大学における研究も国際化が進む昨今, 早い段階から積極的に海外に出て共同研究を行う姿勢は, 同年代の研究者と比較しても目を見張るものがある。

今回は三週間の調査研究という短い期間であったが, 当初の目的通り理論モデルの作成及び論文作成の目処を立てて無事帰国した。また, 本人の報告にもある通り, 共同研究者である Zihelr 博士以外の現地の研究者とも精力的にコンタクトを取り, 議論や研究室見学, ショートセミナーを行う等, 本事業の支援により得られた機会を最大限に生かすことが出来たようである。

坂下さんは来年度から日本学術振興会特別研究員 (DC2) にも採用されているため, 今後も益々研究を発展させ, 我が国を代表する若手女性リーダーとしての活躍が期待される。

(お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科自然 (応用科学系)・曹 基哲)

学生海外調査研究	
Suzan=Lori Parks による戯曲の上演資料調査	
佐藤 里野	比較社会文化学専攻
期間	2011年8月21日～2011年8月28日
場所	ニューヨーク市、アメリカ合衆国
施設	New York Public Library

## 内容報告

### 1. はじめに

今回の調査では、劇作家スーザン＝ロリ・パークスによる舞台作品の上演映像を閲覧するため、ニューヨーク市にあるニューヨーク公立図書館の TOFT Archive (Theatre on Film and Tape Archive) を訪れた。同資料館には、パークスの作品の映像資料が多数所蔵されており、本調査では戯曲①*Imperceptible Mutabilities in the Third Kingdom*(1988)、②*The Death of the Last Black Man in the Whole Entire World* (1990)、③*The America Play*(1994)、④*Venus* (1996)、⑤*Topdog/Underdog* (2001)の5作品に加え、パークスが加わった2つのプロダクション⑥*Golden Boy*(2002)、⑦*Urban Zulu Mambo*(2002)の計7つの作品を視聴した。

アフリカ系アメリカ人女性劇作家として活躍するパークスは、演劇を現代社会の諸問題点に介入する政治的手段と捉え、とくにジェンダー批評とポストコロニアル批評において重要な作品を数多く発表してきた。それらの多くは出版されており、それらを読むことは可能であるものの、その上演スタイルが非常に複雑でユニークであるため、戯曲テキストのみの分析に上演資料の分析を加えることが不可欠である。したがってこの海外調査の目的は、上記の作品の上演状況を確認し、これまでにテキストを対象に行ってきた分析に対する実証的な補足とすることであった。本稿ではおもに戯曲 *Venus* のテキスト分析と上演映像の考察をふまえ、本調査の成果の一部として報告する。

### 2. 劇作家スーザン＝ロリ・パークスについて

スーザン＝ロリ・パークスは、1964年アメリカ合衆国ケンタッキー州で生まれ、マウント・ホリヨーク大学英文科在籍中の1980年代に、ジェイムズ・ボールドウィンの影響を受けて劇作を始めた。大学内や街中のバーで初期の戯曲の上演を成功させた後、劇作家としてすぐに頭角を表し、3作目にあたる *Imperceptible Mutabilities in the Third Kingdom* 以降からはニューヨークの劇場や演劇フェスティバルで上演活動を開始し、演劇界から高い評価と注目を集めるようになった。2002年には戯曲 *Topdog/Underdog* によりピューリッツァー賞を受賞し、現代アメリカ演劇におけるもっとも重要なアフリカ系アメリカ人女性劇作家であると見なされている。

パークスの劇作家としての活動やその作品全般には、「アフリカ系アメリカ人女性」という彼女の出自や経験が反映されており、人種やジェンダーにより抑圧されてきた「黒人」や「女性」の歴史を、演劇という媒体を通して語り直すという試みは、彼女の創作にとって重要なモチベーションとなってきた。しかし一方でパークスは、「黒人」や「女性」という集合の内部に存在する様々な差異や個々の状況を無視して「弱者」という一元的な集合に仕立て上げてしまうことの危険性に警鐘を鳴らしてもいる。つまりパークスは社会的・文化的な差別に対する意義申し立てを重要なミッションとしながらも、単純にマイノリティの権利を主張するような立場はとらず、むしろ「アイデンティティ」そのもののあり方を問うことで、その社会的構築や意味付けのプロセスを解体することを試みているのである。

以上のようにパークスの政治性を位置づけた上で、パークスの演劇実践及び戯曲作品の分析は、これまでの報告者の研究内容を補足し、さらに新たな視点を加えることができると考えられる。まず、既述のパークスの政治的な立場は、報告者が過去2回の本学の支援による海外調査において分析してきた *Split Britches*、*Circus Amok* といったパフォーマンスのグループに見られる政治性に通じるものである。これらはどちらも、不毛な分離主義 (separatism) を避けつつ、いかに社会的な

差別への抵抗を行うかという問いに取り組んでいるグループである。よって今回の調査によって加えられるパークスの実践の分析は、報告者が研究対象としている 80 年代以降のアメリカにおける芸術実践と他者の表象の政治との関係の一端を読み解くひとつの例として有効であり、報告者がとくに注目している現代演劇・パフォーマンスの展開とフェミニズムの関係、すなわち舞台芸術と「女性」の表象の問題とも密接な関わりがある。

また、パークスの実践を研究対象に加えることで、これまでの研究にサバルタン・スタディーズの視点、つまり、「他者」と代理表象の関係を問題化する視点を新たに取り入れることができると考えられる。後述するように、パークスの作品の独特の上演スタイルは、演劇という媒体を通して、抑圧されて声を封じられてきた他者を「代理表象」する実践についての作者の問題意識を反映している。したがって、本調査では、パークスの作品にみられる「他者」の表象の問題について、テキストの分析と上演資料の分析とを関連付けることとくに力を入れた。以下の部分でこの点について *Venus* の例を挙げて説明し、本調査の報告とする。

### 3. 戯曲 *Venus* の考察

#### 3-1 戯曲について

*Venus* は、パークスの 1996 年の戯曲で、「ヴィーナス・ホットtentott」として知られたサーキ・バートマン (Saartjie Baartman) を取り上げた作品である。バートマンは実在した南アフリカ出身の女性で、非常に大きな臀部が彼女の特徴であった。その身体的特徴は 19 世紀のヨーロッパで「アフリカの女」の他者性を象徴するものと見なされ、フリークショーの舞台などで見世物にされた。パークスの戯曲 *Venus* は、白人の世界における他者としてのバートマンの歴史を、演劇という媒体を通して語りなおす試みである。

*Venus* という作品は、サーキ・バートマンという女性の歴史的な記録に基づいている。ここで、作品に描かれるバートマンの人生を簡単に説明する。バートマンは、南アフリカからイギリス、さらにフランスへと渡り、そこで死を迎えることになるのだが、パークスの『ヴィーナス』では、バートマンの人生は、白人による搾取と暴力の連鎖のうちに描かれている。劇の始めのほうで、バートマンは南アフリカで働いているところをイギリス人の兄弟によって見出され、金儲けの話を持ちかけられる。バートマンは、ヨーロッパで有名になり、金持ちになれるという兄弟の甘言に心を動かされ、イギリスに渡る決心をする。しかしイギリスに到着するとすぐに、バートマンはマザー・ショーマンに引き渡され、彼女が営む見世物小屋のフリークショーに、ヴィーナス・ホットtentott として登場するようになる。しばらくするとマザー・ショーマンのもとに、バートマンに魅了されたという男が現われ、マザー・ショーマンはその男、バロン・ドクトゥールという解剖学者にバートマンを売り渡す。ドクトゥールはバートマンと愛人関係を結び、寝食を共にしているのだが、同時に彼女の身体をつぶさに観察し、ホットtentott 族の女性の身体の記録として医学的な業績を挙げようとも目論んでいる。やがてドクトゥールにも見捨てられたバートマンは、ついには家畜同然に鎖につながれ、番人であるニグロ・リザレクショニスト (Negro Resurrectionist) のもとで死んでいく。リザレクショニスト (=墓から死体を掘起こすもの) という名前からもわかるように、このニグロ・リザレクショニストはバートマンの死体を掘り起こし、彼女を解剖したがっているドクトゥールに譲り渡すのである。

以上が戯曲の大筋であるが、パークスは、上記のようなバートマンの人生を時系列に沿って再現する手法は用いていない。そこで次に、本作品の上演形式について、上演資料の調査結果を踏まえつつ説明する。

#### 3-2 戯曲 *Venus* 上演の状況について

ニューヨーク公立図書館の TOFT にて公開されているのは、ニューヨークの Joseph Pap Public Theatre における *Venus* のプロダクションの一公演で、1996 年 5 月 9 日の上演時間約 2 時間 (117 分) の舞台である。(なお、初演はこのプロダクションに先立つ 1996 年 3 月、Yale Repertory Theatre にて。) 演出には、初演時と同じく、現代演劇の鬼才リチャード・フォアマンを迎えている。

上演時の映像が始まってすぐに目についたのは、フォアマンによる舞台の斬新な舞台装置や演出である。まず、舞台には、観客の視線を横切るように、細いワイヤーが何本もはりめぐらされている。Adina Porter 演じる主役のヴィーナスは、お尻の部分に補填物を入れたコスチュームを身に着けている。そのヴィーナスの身体が、その臀部を含めてあえて「コスチューム」によって作られていることは、観客の側から見てもすぐにわかるような衣装になっている。その他のキャラクターや、また舞台装置についても、歴史的考証に即して 19 世紀のヨーロッパを再現されてはならず、白塗りのメイキャップにサングラスをかけたコロスが登場したり、ヴィーナスと愛人のドクトゥールがベッドで語り合う場面では、大きなベッドを舞台の床に垂直に起こすことで、観客にあたかも、ベ

ッドにいる2人を真上から覗いているような気分させたりと、プロダクション全体として演劇的リアリズムとは程遠い、アヴァンギャルドな舞台作品であるという印象を受けた。こうした視覚的な印象は、演出家であるフォアマンのアイディアによる部分が大きいのだが、その印象が作品全体の中でもつ意味や効果を考えると、フォアマンの舞台のユニークさは、パークス自身の劇作法と噛み合っているものだということがわかる。

パークスは、戯曲テキストにおいて、上演そのものの形式を決定付けるいくつかの指示を出している。まず、キャストिंगに関しては、主演のヴィーナスを除いては固有名詞ではなく「医者」や「リザレクショニスト」などのように、役割のみを暗示する名前に設定されており、さらにその「役割」たちは、人種的、性別的な一貫性を無視したダブル、もしくはトリプル・ロールで上演されることになっている。また、劇中の「時間」の使い方にも、パークスは独自の手法を用いている。芝居は1幕31場で構成されているのだが、幕開きの「序章」(Overture)に続いて、通常であれば最後にくるはずの第31場から始まり、進行とともに30、29、28と遡り、第1場で終幕となる。それに伴い、あらずじ上ではクライマックスに置かれるはずのヴィーナスの死が、冒頭で宣言される。さらに劇中には登場人物の過去の回想とも、未来の暗示ともとれる劇中劇が繰り返し挿入されるなど、「時間」についてパークスはこと錯綜させており、見るものにその意味を考えさせるようにしている。

全31場の間には一度、インターミッションが置かれる。パークスは、普通であれば観客が席を離れてトイレに行ったりロビーで休憩を取ったりするこのインターミッションを「第16場」とし、登場人物の一人に、ヴィーナスの死後解剖によって書かれた学術発表の原稿を読み上げさせる。このモノログを聞くかどうかは、観客の自由とされているのだが、上演されたものを残さず見ておきたい観客にしてみれば、この間に席を立つことはためらわれるだろうし、席を立ったとしても、その間に自分が見逃した、あるいは聞き残したことがあるという事実は気になり続けるだろう。閲覧した映像には、このインターミッション/第16場も収められており、立ち上がる人影も見えたものの、通常の芝居の休憩時よりははるかに多くの観客が席を立たずに(立てずに)劇場内に残っていたようだった。ちなみにVenusの閲覧時、TOFTのスタッフは、この第16場はインターミッションだからスキップしたほうが良いとアドヴァイスをくれたのだが(映像はテープ3本に分けて保存されており、2番目のテープにはインターミッションのみが収められていた)、事情を説明し、無事に全部見せてもらった。このインターミッションの使い方からも、パークスの劇作の独自性がうかがえる。

ここまで述べたことはおもに、作品の視覚的效果や上演形式についての部分であるが、パークスの戯曲における人物造形と、それが実際に上演されたときの効果についても触れておく必要がある。「故郷のアフリカから白人によってヨーロッパに連れて行かれ、そこで見世物にされたあげく孤独な死を迎えた」というヴィーナス/バートマンは、ともすれば観客の憐憫と憤怒を誘う「悲劇のヒロイン」としてとらえられがちである。しかし、パークスの描くヴィーナスは、狡猾で計算高く、人間であれば誰でも持っていると思われる愚かしい部分を併せ持った複雑なキャラクターである。この点に関しては、戯曲テキストからもわかる部分であり、上演の映像で見た演技や、それを見て笑ったりする観客の反応などから、ヴィーナスが「悲劇のヒロイン」ではなく、生身の人間らしい多面性を持って描かれていることがよりはっきり伝わってきた。

以上のようなVenusの作品形式、つまり、フォアマンによるリアリズムの手法によらない舞台装置やコスチューム、慣習的で直線的なナラティブの進行を混乱させる作品内の時間の設定、そして単なる「犠牲者」でも実在の人物のドキュメンテーションでもなく、フィクショナルな部分が大いに加えられ複層的に創造されたヴィーナスといった上演の諸状況は、観客のプロットや登場人物への安易な感情移入を阻む効果がある。また視界をさえぎるかのようにはらわれているワイヤーや、観客自身にどう行動するかを選択を任せるインターミッションなどからうかがえるように、この作品には、「見る」ということをめぐってともすれば受動的になりがちな観客のあり方を批評的なものへと変容させる契機が大いに含まれているといえる。こうしたプレヒト的な異化効果は、Venusだけではなくパークスの戯曲全般に見られるものであり、それらをよりよく理解するためには、やはりテキストのみの分析では不十分であり、観客の様子や反応も含め、実際の上演の状況を知る必要があることを改めて感じた。

Venusに関しては、サーキ・バートマンという実質的には歴史的「被害者」をモデルにした劇中のヴィーナスが打算的で野心的なキャラクターを設定にされていることに対し、一部の観客や批評家が不快感を示したことも知られている。例えば、ジーン・ヤン(Jean Young)という批評家は、パークスがヴィーナスの造形に加えたフィクショナルな要素を否定的にとらえ、作品は「史実を無視」し、さらに劇作家が本来犠牲者であるはずのヴィーナスを再びグロテスクな見世物にしている

と批判した。<sup>1</sup>しかし、実際に上演された作品の映像を見る限り、そのような批判は的外れなものであるように思われた。というのも、テキストからキャスティング、コスチュームにいたるまで様々なところで「演劇」という枠組みが強調されているこの作品においてパークスはそもそも、サーキ・パートマンの生涯や歴史を、史実通りに再現することを試みているわけではないことは明らかだからである。むしろパークスが「演劇」という表現媒体に見出している可能性とは、あるインタビューで彼女が語っているように、歴史を「再現」することではなく、「創造」することである。

（“Possession”というタイトルのエッセイで、パークスは、「歴史とは記録され、記憶される出来事であるのだから、わたしにとって劇場は、歴史を「作る」(“make”)のに完全な場所である」と表現している。<sup>2</sup>)「作る」という言葉には、歴史に対するパークスの考え方が表れている。たしかにパークスは、抑圧されてきた「黒人」や「女性」の語られてこなかった歴史の語り直しをミッションとしているが、彼女はつねに、「語り直す」という試みそのものが、常に語るものによる創造性を免れないことを認識している。戯曲テキスト、そして上演映像のなかで、ヴィーナス・ホッテントットの歴史を再構築する際のパークスの創造性は、消されているどころか逆に強調されており、それによって観客としてのわたしは、目の前のヴィーナスが「本物」ではなく、「代理表象」であるという認識をはっきりと持たされるように感じた。作者の創造性が入りこむことにより、見る側にとっても芝居は理解が難しくなるのだが、それには、「再現」ではなく「表象」を見ているという意識を観客にも共有してもらいたいというパークスの意図があるのではないだろうか。

### 3-3 Venus とサバルタン・スタディーズの視点

戯曲のテキスト分析と、上演資料の分析によって、Venus の上演のスタイルは、作者パークスの「他者」を「語り直す」という行為への慎重かつ創造的な姿勢と密接に結びついているという考察が導き出された。そしてこのような「他者」への視線が、パークスの作品と、サバルタン・スタディーズの視点とを関連付けていると考えられる。「サバルタンは語るができるか」というギャトリ・スピヴァクの有名な問いに象徴されるように、サバルタン・スタディーズとはサバルタン、つまり声なき他者をいかに表象するのかという問題を取り扱うものである。歴史的に抑圧されてきた「他者」の声を拾いつつ、自身の「創作」として表象しようとするパークスの試みは、「他者」の歴史を表象するという行為が決して無垢なものではなく、必ず語り手の作為や恣意が介入してしまうことを認識した上での表象行為であるといえるだろう。しかし、その介入なしに「他者」を表象することが不可能であるとき、表象の問題は作り手だけではなく、受け手、つまり観客の側にも共有されなくてはならない。今回の映像資料の調査では、パークスの戯曲テキストの内容とその政治性は、実際のパフォーマンスを通してより明確に読み手／観客に伝達されるということが明らかになった。その意味でやはりパークスの演劇に見られる独特の上演スタイルは、物語やあらすじそのものと同様、ときにはそれ以上の意味を持っており、そのことが、パークスの作品を理解することを難解にしているともいえるのだが、パフォーマンスを重視する劇作により、パークスは観客の問題意識を促し、作り手だけではなく見る側もまた、表象の問題と無縁ではないという認識を要求しているのである。

## 4. おわりに

スーザン＝ロリ・パークスの演劇に見られる「他者」の歴史の表象の問題は、抑圧されてきた「他者」をどのように表象するかという観点から、フェミニズム研究やサバルタン研究と密接に関わるものである。「女」をいかに表象し、語り、論じることができるのかという問題意識は、現代社会のグローバルな状況における国際的な女性のリーダー育成のためには不可欠な視点である。この視点から、報告者は今後も「演劇」という媒体が、社会にとってどのような意義を持ちうるのかを考察していきたい。スーザン＝ロリ・パークスに関する調査の成果に関しては、まず Venus 及びその他の戯曲に見られるパークスの問題意識とサバルタン・スタディーズの関連について具体的に検証し、明らかにした上で、日本アメリカ文学会の演劇支部会で口頭発表(2013年)を予定している。そして、博士論文執筆に関わる研究においては、TOFT で閲覧した他の戯曲の上演資料の分析を引き続き行い、パークスの実践を、現代演劇・パフォーマンス・アートのより大きなコンテキストの中で位置付けていきたい。

## 注

1. Young, 704.
2. Parks, 4.

## 参考文献

Parks, Suzan-Lori. *Venus*. New York: TCG, 1997.

---, "Possession" *The America Play and Other Works*. New York: TCG, 2001.

Young, Jean. "The Re-objectification and Re-commodification of Saartjie Baartman in Suzan-Lori Parks's *Venus*." *African American Review* 31 (1997):699-708.

さとう りの／お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科 比較社会文化学専攻

## 指導教員によるコメント

パフォーマンス研究において上演の要素を考慮に入れて論を展開することは重要であり、その意味で、今回の調査でスーザン＝ロリ・パークスの映像資料を視聴できたことはたいへん有意義であったと考える。

報告の『ヴィーナス』の分析に関して、フォアマンの演出による特徴が実際に検証できたのは大きな収穫であったことがうかがわれる。今後、視聴した映像資料の分析に理論的な解釈を加え、「フォアマンの舞台のユニークさは、パークス自身の劇作法と噛み合っている」ことを具体的に証明してゆく必要があるだろう。同時に他の上演分析についても詳細な分析が必要である。また、「再現」ではなく「表象」を見ているという意識を観客にも共有してもらいたいというパークスの意図があるのではないだろうか。」という部分についてであるが、これらの語を英語にするとどちらも **representation** となる。英語での記述も念頭において、厳密に自身の主張を精査していくことが求められる。

今後博士論文を執筆するにあたり、サバルタン・スタディーズの観点を新たに導入するようであるが、パークス作品をマイノリティではなくサバルタンの概念により分析する妥当性を主張するとよい。

(お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科 (文化科学系)・戸谷 陽子)

学生海外調査研究	
W.W. コベット（1847-1937）および「ファンタジー」に関する資料調査	
西阪 多恵子	比較社会文化学専攻
期間	2012年9月9日～2012年9月24日
場所	ロンドン（イギリス）
施設	英国図書館、ギルドホール図書館、王立音楽大学図書館、遺言登録本局

## 内容報告

### 1. 海外調査研究の目的と必要性

#### 1.1 概要 W.W. コベット（1847-1937）および「ファンタジー」に関する資料調査

実業家でアマチュア音楽家のW.W.コベット（Cobbett, Walter Willson 1847-1937）は、20世紀初頭、イギリス室内楽の創作と演奏を、コンクールの実施や作品委嘱等によって推進した。コベットが提唱した「ファンタジー」は、17世紀のイギリス音楽のファンシーにヒントを得た単一楽章の室内楽の曲種であり、イギリス音楽界に多大な影響を与えたとされる。しかし、コベットの活動および「ファンタジー」に関する実質的な研究はほとんどなされておらず、関連資料の所在も不明確である。今回の調査目的は、関連資料の所在の調査・確認、その閲覧による情報収集および作品研究の資料の閲覧である。未出版資料のみならず、関連出版物の多くが電子化されておらず、著作権上の制約により、日本国内での閲覧は困難なため、現地調査が必要であった。関連資料を所蔵するロンドン市内の図書館等において調査を行うこととした。

#### 1.2 各調査対象館・局とその主な調査資料

以下の各項目名は各館・局における主な調査資料である。それぞれの調査目的もしくは本調査研究との関係を記す。

##### 1.2.1 英国図書館（British Library）—Music Student と Chamber Music A Supplement to the Music Student

コベットは月刊誌 *Music Student*（1908-1921刊行、以下同）の付録として、隔月刊の *Chamber Music* を私費で編集発行した（1913-1916）。同誌はコベットと同時代の音楽観等を伝える基本資料とされ、後にコベットが編集発行する室内楽事典 *Cyclopedic Survey of Chamber Music*（1929-1930）には同誌からの補筆転載とみられる項目が多い。また、*Music Student* 自体にもコベットは執筆している。両誌ともに本研究に関連する内容を含むと思われる、全体の通読を計画した。

##### 1.2.2 ギルドホール図書館（Guildhall Library）—音楽家組合の議事録

ギルドホール図書館は、ロンドンとくにシティの歴史を専門とする公共調査図書館である。その主要アーカイヴの一つが同業者組合文書（The City of London Livery Company Archives）である。音楽家組合（Worshipful Company of Musicians 以下WCM）は16世紀のギルドから発展した音楽振興団体であり、その資料もこれに含まれる。議事録のほか、書簡、同組合パンフレット類、新聞記事スクラップなどがある。

コベットは WCM のメンバーであり、「ファンタジー」コンクールの最初の2回を同組合の主催で行った。また、後に同組合の理事長（Master）を務めた。

##### 1.2.3 王立音楽大学図書館（Royal College of Music Library）—R.C.M.評議会議事録、R.C.M. magazine、学生登録簿、女性音楽家協会アーカイヴ

コベットは、王立音楽大学（Royal College of Music 以下RCM）に対し、学生を対象とする室内楽の作曲および演奏の賞のために資金を提供した。議事録および RCMの刊行物 *R.C.M. magazine* はその関連記事を探すために、また、学生登録簿は「ファンタジー」作品の受賞者に女性名が多い<sup>1</sup>ことから、当時の作曲専攻学生数の性別比を把握するために、閲覧することとした。

女性音楽家協会（Society of Women Musicians 以下SWM）は1911年に創設されたイギリスの団体である。会員にはプロもアマチュアもおり、男性は準会員として入会を認められた。コベットはその創設後間もない時期からの準会員であり、講演や室内楽コンクール、SWMの室内楽部門への寄付やイギリス室内楽楽譜の寄贈などを行った。1972年のSWM解散後、その資料は RCMに移管された。書簡や新

聞記事スクラップなどにコベットの関連の資料がある。

#### 1.2.4 遺言登録本局 (Principal Probate Registry) —コベットの遺言書

コベットの個人的な背景について詳細は明らかではない。遺言書の閲読は、コベットの私的な面やその遺産の用途について手がかりを得るためである。

## 2. 各館・局における調査結果

各館において、予めウェブサイト上の目録や問い合わせにより所在を把握していた資料について概ね確認した。記録文書の残存など一次資料に関する新たな手がかりはなかったが、閲読（一部転記または複写）した内容から今後の研究計画にとって有用な情報や示唆がいくらか得られた。以下、調査結果の概要を記す。

### 2.1 英国図書館

月刊誌 *Music Student* については、同館は第1巻および第2巻を所蔵せず、そのほか若干の欠号があることがわかった。また時間不足のために、全体の通読にはいたらなかった。

同誌の誌名に *Student* とあるが、その読者対象は副題に「音楽を学び、教え、聴くすべての人のために」とあるように学生に限らない。発行者名 *Home Music Study Union* から示唆されるように、啓蒙的な性格を持つといえる。コベットの編集による隔月刊誌 *Chamber Music A Supplement to the Music Student* は、その付録として挟み込まれていたらしい。同館では全22号（冊）が合冊製本され、*Music Student* とは別物として扱われているが、両誌の関係は密接に思われる。例えば、1913年6月の *Chamber Music* の創刊は *Music Student* 誌で大々的に予告され、その後も *Music Student* の目次に *Chamber Music* の内容がしばしば混在する。また、1916年11月に *Chamber Music* が終刊を迎えるまで *Music Student* にコベットの執筆記事はほとんどみられないが、その後、連載“*Chamber Music Notes*”を執筆しており、これは *Chamber Music* でコベットが執筆連載した“*Obiter Dicta*（傍論）”に続くものともいえる。これらにはコンクールや「ファンタジー」への言及も多い。両誌の関係には、本体と付録という以上の相互補完的な面もあったように思われる。

### 2.2 ギルドホール図書館

音楽家組合 (WCM) の議事録は、1772年から1949年まで全12巻あり、その内の第8巻(1898-1907)、第9巻(1907-1914)、第10巻(1914-1925)、第11巻(1925-1937)を閲読した。議事録には、報告および審議決定事項が整った形式で明瞭な筆跡によって記録されている。これらはコンクール等に関する経緯を示し、コベットのWCMにおける積極的な働きをうかがわせるものであった。

これには二つの面がある。一つは、室内楽および「ファンタジー」の推進のために、コベットが立案したWCMの名によるコンクール等の企画であり、もう一つは、コベットのWCMにおける役職である。

WCM主催による2回の「ファンタジー」コンクールの他に、コベットは「ファンタジー」作品の複数の作曲家への委嘱と室内楽の貢献に対するメダル賞の設立をWCMの名で行うことを提案し、それぞれ実施されている。いずれの場合もコベットが企画案と財源の提供を申し出てWCMの名による実施を求め、WCM委員会に申し出て敬意を表してこれを受諾している。コンクールの際には、具体案作成のための委員会が設けられた。WCMは「古くからあるがあまり裕福ではないシティ・ギルド」(Cobbett 1929: 284)であり、財政面では慎重であったようである。コンクールの賞金は2回とも、第1位はコベットが、その他の賞はWCMの会員個人が提供した。初回のコンクールは成功し、入賞作の演奏会や楽譜出版によってWCMは収入を得るが、2回目のコンクールはWCMが出費しないことを条件に実施され、入賞作の出版費用はある会員の寄付でまかなわれた。コベットはその後1920年まで合計7回の「ファンタジー」を主な課題とするコンクールを実施したが、3回目以降はWCMによらず単独で行っている。

コベットのWCMにおける役職は、議事録によれば、1926年に副長官 (Junior Warden)、翌年長官 (Senior Warden)、さらに翌1928年理事長 (Master) といずれも1年任期を全うしている。驚くべきことに、コベットはその後、89歳で没する3ヶ月前の1936年10月まで年4回の委員会に欠かさず出席し、最後の回においても、コベット・メダルの対象者について具体的な提案をしている。これをWCMの活動に対するコベットの熱意の表れとみるならば、コベットとWCMとの関係という点で示唆深く、コンクール等の企画もこの点から検討の余地があると思われる。コベットが室内楽とファンタジー推進のためにWCMに働きかけた背景や、コベットの活動におけるWCMの重要性を考えさせる記録である。

議事録にはまた、コンクールの詳細についてこれまでみた資料と合致しない記述もみられた<sup>2</sup>。

議事録のほか、WCMの資料にはパンフレット類もあることから、報告者は現地調査前に第1回コンクール募集要項の存在を期待していた。この募集要項でコベットが提唱した意味での「ファンタジ

一」という言葉が初めて登場したとされるからである。その結果、募集要項そのものの残存は確認できなかったが、WCM 関連の新聞記事スクラップに、これを掲載した音楽新聞記事が見出された。「ファンタジー」コンクールについての今後の考察に重要な資料となると思われる。

## 2.3 王立音楽大学図書館

### 2.3.1 王立音楽大学 (RCM) とコベット

コベットは学生対象の賞のための資金を1920年以降、毎年提供し、1928年には1000ポンドの寄付により、恒久的に続く賞としている。その経緯などを知るため、1920年代の評議会 (Council) および執行財務委員会 (Executive and Finance Committees) それぞれの議事録を閲覧した。議事録では、概ね執行財務委員会の承認事項がその3週間後に評議会で報告されるという形で、コベットの申し出とその受諾、受賞者等が簡潔に記録されている。また、*R.C.M. magazine* (年3回刊) については、主に受賞記録をみるため、1920年代および1930年代刊行分を閲覧した。受賞記録については *R.C.M. magazine* も議事録とほぼ同様であり、いずれも詳細度は年次により異なり、すべての回について記録がなされているかどうかは明確ではない。一方、受賞作品の「ファンタジー」の演奏によるコベット賞受賞といった興味深い記録も散見された。

学生登録簿 (*Student Register*) については1920年代分を閲覧し、主科 (principal subject) または副科 (second subject) を作曲とする学生名により性別を推定し、学生数の性別比をみた。その結果、主科は男性名と女性名の比率が5対1、副科は同じく2対1で男性名が多かった。受賞作がすべて「ファンタジー」である1923年から1934年までについて、受賞者名が明らかなのは、男性名3人に対し女性名は8人とかなり多く、「弦楽四重奏曲」など一般的な曲名が多いその後の受賞者名は、男性名22人に対し女性名はわずか4人であるのは興味深い (Maw 2010: 119-120)<sup>3</sup>

なお、コベットはRCMの他、王立音楽院 (Royal Academy of Music) に対しても、学生の賞のために寄付している。また、トリニティ音楽大学のフェローでもあり、ギルドホール音楽大学に室内楽楽譜を寄贈するなど諸音楽学校との関わりがあるが、とくに、RCMとの関係が顕著にみられる。

### 2.3.2 女性音楽家協会 (SWM) とコベット

女性音楽家協会 (SWM) アーカイヴの資料には、フォルダーに収納されたパンフレット、プログラム、書簡等700点余と、新聞記事スクラップ帳等がある。コベット関連資料を中心に閲覧した。頻出する事項は、コベットの寄贈によるイギリス室内楽楽譜のライブラリー (Cobbett Free Library of British Chamber Music) とコベット・チャレンジ・メダル (弦楽四重奏演奏コンクール) それぞれに関するものである。パンフレットや新聞記事等の数多いことから、盛んな活動状況がうかがえる。

上記のライブラリーはイギリスの現代作品を主とする百数十点の楽譜からなり、20曲ほどの「ファンタジー」を含む。コベットはこれらの楽譜が会員以外の人々にも利用されることを望み、1918年の開設以来、SWMは貸出方法を定めて組織内外にライブラリーについて広報した。*Times* 誌によれば、「昔のイギリス音楽は多くの図書館に楽譜があるが、現代音楽の楽譜貸出図書館はこれが初めてと思われる」(1918.2.26)。なお、このライブラリーは1972年のSWM解散後、オーストラリアのアデライド大学に譲渡された。数十年間の状況の変化を感じさせる双方の書簡もアーカイヴに保管されている。

コベット・チャレンジ・メダルは1927年、室内楽演奏の向上をめざして創設されたコンクールである。当初から一般利用を目的としていたライブラリーと異なり、初めは会員対象としていたが、後に一般のアマチュアに開かれた。コベットは「SWMの第一の恩人 (first benefactor)」<sup>4</sup>であると同時に、SWMを通じて一般の室内楽への関心を高めようとしていたと思われる。

アメリカの室内楽のパトロンであるエリザベス・クーリッジ<sup>5</sup>の訪英の際、コベットはクーリッジにSWMの晩餐会への招きに応ずるようはたらきかけた。パトロンとして自らと立場を同じくするクーリッジを、音楽界の女性として彼女と立場を同じくするSWMに引き合わせようとしたようすが書簡などからうかがわれる。SWMについてコベットは「良い音楽のためにこれほどの実績を挙げてきた女性団体は世界のどこにもないだろう…注目すべきロンドンの驚異の一つである。イギリスのあらゆる女性音楽家の支持に値する」(Cobbett 1930: 435)と称賛した。SWMへのこうした言及によって、コベットはその宣伝に与したともいえよう。

一方、SWMの男性の準会員や音楽家に対する態度についても示唆深い資料が見られた。SWMの拠点は女性団体の施設であり、男性の利用は禁止されたが、準会員の男性作曲家たちにも作品発表の機会を与えるなどしている。

コベット関連の資料としては、ほかにコベット記念賞 (1948年に設立された隔年の室内楽作曲賞) 関連のパンフレットなどがある。本調査での閲覧はアーカイヴの目録からコベットが検索される資料にほぼ限り、また時間の都合上、そのすべての閲覧は果たせなかった。SWMアーカイヴの多くの資料には、そのほかにもコベットと関連する記録や情報があると考えられよう。

## 2.4 遺言登録本局

コベットの遺言書は死の 2 年前、1935 年に作成され、その内容は遺産の扱いについて書かれている。妻は 1932 年に亡くなっており、文面上、遺産分与の対象に親族らしい名前はない。遺産分与の筆頭にロンドン市内に住むある夫人の名が挙げられているが、その関係は記されていない。次に実業家としての共同創設会社のパートナー、ついでハウスキーパーの女性、WCM、および SWM などが挙げられている。遺産額や分与の仕方は、今後の研究過程で参考データとなりうるであろう。

## 3. まとめと今後の課題

本調査研究は、本学における報告者の研究テーマ「コベットとその“ファンタジー”」に関する資料調査であるが、「コベット」と「ファンタジー」の二つの事項の前者に重点をおく結果となった。コベットの伝記的な詳細は不明な点が多いが、その活動に関し、一次資料を含む当時の文献によって新たな情報がある程度得られた。その中でギルドホール図書館と RCM 図書館での調査結果を元にそれぞれ次の 2 つの事柄について、博士論文の各 1 章として発展させたいと考えている。一つは初回のコンクールを中心とするコベットの活動と WCM との関係であり、もう一つはコベットと SWM および女性音楽家との関係である。

後者については、あるいは、『ジェンダー史学』への投稿も考えている。上述の事柄にコベットと SWM 会員個人との繋がりを視野に入れることによって、当時の音楽界の女性とコベットの関係についてより多面的な把握が可能であろう。例えば、*Chamber Music* には、SWM 創設メンバーであるマリオン・スコットとキャサリン・エッガーの共同執筆による連載記事がある。室内楽に関する女性の活動成果について、連載第 1 回は室内楽クラブ、続いて、演奏会の企画主催、演奏、作曲、といった順に回を重ねていく<sup>6</sup>。コベットは女性たちに発信の場を提供することによって、*Chamber Music* の編集者として自らに利すと共に、男性作品中心の音楽界の視野の拡大や女性の可視化に与したといえるかもしれない。

これらコベットの活動に「ファンタジー」がどのように位置づけられるかは今後の課題である。本調査研究においては、「ファンタジー」の諸作品について英国図書館とギルドホール図書館で若干の出版譜、手稿譜を閲覧し、タイトルなどを確認した。多くの作品が著作権期間内にあるため、今後の研究計画によっては、複写許可のための手続きを試みたい。また、RCM における調査では「ファンタジー」とジェンダーの関係に示唆が与えられた。本研究テーマに関して、報告者はこれまでに「ファンタジー」とソナタ形式との関係について検討したが、ソナタ形式はとくに 20 世紀末にジェンダーの観点から論じられた音楽形式でもある。一方、コベットのアマチュアという立場は音楽に関わる女性にとって概して男性以上に密接な立場であり、コベットと SWM との関係は、本研究にジェンダーが有効な視点となりうることを示唆するといえよう。こうした観点をも視野にいれ、本調査研究の結果を踏まえた各論をまとめつつ、今後の研究を進めていきたい。

本調査研究は、国際的な女性リーダーの育成を目的とするプログラムに与るものである。海外研究ならではの歩を進める機会が与えられたことに深く感謝する。

## 注

1. “Cobbett composition prizes at the RCM, 1923-50” (Maw 2010:119-120)
2. 第 1 回コンクール入賞者について、他の文献では 4 位あるいは 6 位とされている Haydn Wood の名が議事録では第 2 位にある。
3. 注 1. 参照。受賞者の一覧であり、性別への言及はない。
4. The Christian Science Monitor special music correspondent, “The Society of Women Musicians,” *The Christian Science Monitor*, 1920.8.14. 執筆者の correspondent は SWM 創立の中心メンバーであったマリオン・スコット。注 6 参照。
5. Coolidge, Elizabeth Sprague (1864-1953) アマチュアのピアニストで作曲家でもある。Frank Bridge や Eugene Goossens などイギリスの作曲家をも支援した。1926 年、室内楽功労賞のコベット・メダル (本稿 2-1) を受賞。1932 年、クーリッジ自身も同様の賞を設立した。第 1 回の受賞者はコベットであった。
6. *Chamber Music* の創刊号から第 11 号まで、1913 年から翌年にかけて 9 回に渡り、連載された。Scott, Marion (1877-1953) は音楽学者、作曲家、ヴァイオリニスト。Eggar, Katherine (1874-1961) はピアニスト、作曲家。

## 参考文献

- Cobbett, W.W. (1913-1916) (ed.) *Chamber Music: A Supplement to The Music Student*.  
 — (1929-1930) *Cobbett's Cyclopedic Survey of Chamber Music*, 2 vols, London: Oxford University Press

(Reprint: London: Travis & Emery Music Bookshop, 2009)

Maw, D. (2010) 'Phantasy mania': Quest for a National Style. In *Essays on the History of English Music in Honour of John Caldwell: Sources, Style, Performance, Historiography*, ed. E. Hornby and D. Maw, Woodbridge: The Boydell Press, 97-121.

*Music Student*, the Home Study and of the Music Teachers' Association, vols. 3-14 (1910-1921).

*The R.C.M. Magazine*, Royal College of Music Union. vols. 17-33 (1920-1937).

Royal College of Music. Minute Books. Council, vol. 5; Executive and Finance Committees, vols. 13-14.

—— Student Register 1921-1930.

Society of Women Musicians Archive. Royal College of Music.

Worshipful Company of Musicians. Guildhall. Court minute books, vols. 8-11 (1898-1937).

—— Scrapbook of press cuttings, [vol. 1], (1893-1915).

にしざか たえこ／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻

### 指導教員によるコメント

本調査研究の報告者である西阪多恵子さんは、すでに学界において、女性と音楽に関する研究者として一定の評価を得ている研究者であるが、今回のプログラムによる調査研究では、19世紀末から20世紀前半期のイギリスにおいて活躍した、W.W.コベットというアマチュア音楽家と、ファンタジーという音楽のジャンルとの2つの事項について一次資料の文献資料等を、英国図書館、ギルドホール図書館、RCM 図書館などで調査を行なった。その結果、室内楽の領域で女性たちが様々な音楽に関わる活動を発信し、とりわけ組織としての女性音楽家協会 SWM と個人としての様々な女性音楽家たちとコベットとが、アマチュア音楽家という軸を通じて、イギリスの音楽界において重要な位置にあったことを推察する糸口を見いだした。このことは今後の音楽史研究において、アマチュアと女性という分野を積極的に開拓するための、新しい知見を得る成果として高く評価できる。

(お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科 (文化科学系)・永原 恵三)

学生海外調査研究	
パリ・オペラ座付属図書館におけるバレエ・デ・シャンゼリゼに関する史料調査	
深澤 南土実	比較社会文化学専攻
期間	2012年7月4日～2012年7月13日
場所	フランス
施設	パリ・オペラ座付属図書館、シネマテーク・ド・ラ・ダンス

## 内容報告

### 1. 調査の目的

本調査の目的は、バレエ・デ・シャンゼリゼ *Les Ballets des Champs -Élysées* (1945-1951) に関するパリ・オペラ座付属図書館における全史料の調査であった。バレエ・デ・シャンゼリゼは戦後フランスの代表的なバレエ団であり、当時はバレエ・ド・モンテカルロなどとともにパリ・オペラ座を凌ぐ勢いを持ったバレエ団であったにも関わらず、十分に研究がなされていない。

筆者の調査では同バレエ団の創作した作品は 36 作品だが、以前不明点が多くあった。当時のプログラム、またバレエ団が公演をした全作品に関する史料、すなわち新聞・雑誌記事を読み解くことが必要であり、本調査ではそれらの史料の閲覧を第一目的とした。

本調査では、バレエ団の実態、上演年や場所、上演作品を始めとし、現在把握できていない部分を明らかにしようとした。昨年度の学生海外調査研究では、筆者はバレエ団結成の契機となり、後にバレエ団の代表的作品であり続け、現在でも再演され続けているプティの振付作品《旅芸人》*Les Forains*、《ランデヴー》*Le Rendez-vous* (1945) を中心に調査した。また、バレエ団の 7 年間の活動のうち前半の上演作品に関しての調査を主に行っていた。本調査によって、可能な限りのバレエ団が創作した全ての作品の詳細とその批評を明らかにすることが出来ると考えた。

### 2. 調査施設

#### 2.1 パリ・オペラ座付属図書館：バレエ・デ・シャンゼリゼ関連資料の閲覧

パリ・オペラ座付属図書館 (Bibliothèque-Musée de l'Opéra National de Paris) は国立図書館の一部でもあり、オペラ座内にあるオペラやバレエ、音楽関連の資料を収める有料の図書館である。所蔵資料をパソコン等検索機で検索することは出来ず、昔ながらのカード式で探して司書の方に資料を依頼して、係の人に運んで来てもらう。すなわち、所蔵資料は、現地に行かないと把握出来ない。

昨年度は主にバレエ・デ・シャンゼリゼのプログラムファイルの閲覧をすることにより、バレエ団の公演日程や演目などある程度把握することが可能となった。また、カンパニーファイル (Dossier Compagnie) を閲覧することにより、新聞・雑誌の批評記事を閲覧、複写依頼を行った。しかしそれだけでは資料として不十分であった。

##### 2.1.1 アーティスト・ファイルの閲覧

今回の調査では、バレエ団に関連した人々の資料アーティスト・ファイル (Dossier d'artist) を主に閲覧することにより、多くの情報を得ることが出来たと言える。

アーティスト・ファイルでは、次のバレエ・デ・シャンゼリゼに関わりの深いダンサー、振付家、作曲家や舞踊批評家の資料を閲覧した。ローラン・プティ Roland Petit, ボリス・コフノ Boris Kochno, ジャニーヌ・シャラ Janine Charrat, アンリ・ソーゲ Henri Sauguet, ジョン・タラス John Taras, ルース・ページ Ruth Page, イレーヌ・リドヴァ Irene Lidova, ダヴィット・リシン David Lichine, マルセル・ベルジェ Marcel Berger, ヴィクトル・グゾフスキー Victor Gsovsky。

ローラン・プティに関するファイルは、プティが昨年度に亡くなるまで精力的に仕事をしていたため、非常に多くあったが、バレエ・デ・シャンゼリゼに属していた 1948 年までの資料を主に閲覧した。そこには、カンパニーファイルには存在しなかったバレエ団やプティの振付に関する新聞・雑誌評を見出すことが出来た。バレエ団の前身であったジャニーヌ・シャラとのリサイタルに関する新聞記事からは、シャラとプティが最初のリサイタルこそ大きな成功には至らなかったが、3 回目の公演

では成功を取めたことが明らかとなった<sup>1</sup>。また、同記事にはプティへのインタビューも掲載されており、プティが47年の年末にはバレエ団を辞めた理由を「性格の不一致による別離？そうかもしれない」と話している。さらに、《悪魔の花嫁》*La Fiancée du diable* (1945)に関する新聞記事<sup>2</sup>、《ユピテルの恋》*Les Amours de Jupiter* (1946)など、価値ある資料を得られた。

《ユピテルの恋》に関しては、プティの振付は表象が豊かで、所作は新鮮で革新的であると評価され<sup>3</sup>、サーカスの遊びやミュージック・ホール風で、プティのダンスにはイタリア風のパントマイムや表情があることもわかった<sup>4</sup>。同シーズンに発表した《ダンス・コンサート》*Concert de Danses*とともに、「(先週の批評をすると)バレエ・デ・シャンゼリゼは宮廷バレエの格調高いスタイルとミュージック・ホールのアクロバティックなスタイルを調和させて組み合わせている」<sup>5</sup>という報告がある。以上の記事から、当時のプティの振付の特徴が後世にも続いていることがわかった。

さらに、《13の踊り》*Treize danses* (1947)の装置や衣裳、あらすじなどがわかった。「一種のカーニバルのパレードの総合のようなもの。馬や馬丁、女騎手、女ピエロや道化師、アルルカンやジル、トランプ占い師、ベルガマスクの飾りのマスクが登場し。群衆には見物人や恋人達、出会いを求める人々がいる」という丁寧な紹介の記事があったことによる<sup>6</sup>。また他の記事からは、この作品が25分であること、名高いクリスチャン・ディオールがデザインした装置に500万フラン、22人のダンサーの衣裳に600万フランの費用をかけたことなどがわかった<sup>7</sup>。

ダヴィット・リシンに関する資料には、バレエ団のプログラムファイルには存在しなかったハウス・プログラム (*encarte*) が数枚含まれており、48年11-12月のパリシーズンにバレエ団が公演した日程や公演プログラム、その時の初演作品の詳細、初演のダンサーの名前など、様々な情報を得ることが出来た。それが筆者の作成中である、バレエ団関連年表作成に多いに貢献した。パリ・シーズンの同時期には、同じシャンゼリゼ劇場にて、バレエ団に関する批評も多い舞踊批評家イヴ・ボナー Yves Bonnat が企画した「バレエ・デ・シャンゼリゼ：衣裳と装置の原画展」も開催しており、展示作品の詳細を掲載した目録も付属していた。

他にはマルセル・ベルジュのファイルの資料は残念ながら一点しかなく、バレエ団に《ダンス・コンサート》を振付けることを報じた記事とその稽古風景の写真<sup>8</sup>を閲覧することが出来た。

ルース・ページのファイルからは、ルース・ページ・バレエ団がニューヨークにて《復讐》*Revanche* (英語では *Revenge*) を公演した新聞記事を見出した。この作品は、1951年に破産寸前に陥ったバレエ・デ・シャンゼリゼを助けようとアンピール劇場でのバレエ団のシーズンにページが補助金を出し、ページ自身がヴェルディの曲《吟遊詩人》*IL Trovatore* から着想を得て振付けをした作品である<sup>9</sup>。ページがその後も自身のバレエ団にてこの作品を多く上演していたこと、そして作品の紹介から、内容などを掴むことが可能となった。

### 2.1.2 作品ファイルの閲覧

アーティスト・ファイルの他には作品ファイル (*Dossier d'oeuvre*) を閲覧したが、バレエ団が創作した作品の中でも、再演されていない作品は資料がほとんど存在せず、情報がオペラ座付属図書館にもない場合は恐らく他の図書館にも所蔵していないのではないかと考えられる。何点か作品ファイルに存在した資料の調査について述べる。《草上の昼食》*Déjeuner sur l'herbe* (1945)に関する新聞記事が2点<sup>10</sup>あった。

また、《旅芸人》の初演時のセルジュ・リド撮影による白黒の上演写真を4枚閲覧し、新聞記事よりも詳細な初演時の衣裳や踊りを認識することが出来た。

さらに、《出会い、あるいはオイディプスとスフィンクス》*Le Rencontres ou Œdipe et le Sphinx* (1948)のためにアンリ・ソーゲが作曲した楽譜を閲覧することも出来た。楽譜は全32ページで、初演の日時や出演者のダンサーが記され、目次には、AからKまでの11シーンの内容、そしてそれらためのページ数が付されていた。それら11シーンの内容はギリシャ神話に基づいたスフィンクスとオイディプスの出会いとスフィンクスからの3つの質問、そしてスフィンクスの死とオイディプスの出発から成立し、時間は22分とも記されていた。楽譜部分はデジタルカメラで撮影させてもらった。

《草上の昼食》と《出会い》は再演を見ることも叶わない。しかし、初演時の振付家や指揮者などが目を通す楽譜や写真を閲覧することを通じて、音楽や写真、プログラムや批評文に書かれているあらすじ、役名をもとに作品の内容や振付を想像する、そのようなことが可能となる非常に貴重な資料を閲覧することが出来たと考える。

## 2.2 シネマテーク・ド・ラ・ダンス：バレエ・デ・シャンゼリゼ関連映像の視聴

本調査の目的はオペラ座付属図書館での史料調査であったが、シネマテーク・ド・ラ・ダンス (Cinémathèque de la Danse) にも連絡を取り、ローラン・プティとバレエ・デ・シャンゼリゼに関わりの深いダンサー、振付家のジャニーヌ・シャラに関連する映像を視聴させてもらった。

シャラの振付作品の映像に関しては、ドキュメンタリ映像 *Janine Charrat L'instinct de la danse* (Luc RIOLON et Rachel SEDDO, 2001, 54min) や *Janine Charrat* (La Cinémathèque de la Danse, 1h31min) などで確認をすることが出来た。

前者の映像は、シャラが幼い頃から天才少女ダンサーとして名を馳せていたことを示す写真や批評文を示し、後のプティとのリサイタルに関する写真も多く取り上げていた。プティ、リドヴァやバビレ、また舞踊批評家のアントワヌ・リビオ、舞踊ジャーナリストのジュラル・マノニへのインタビュー映像もあり、当時の様子を多角的に知ることができたと言える。マノニは、シャラとプティのリサイタルについて、当時のシャラの人気ぶりを振り返り、コクトーやベラルールなどの芸術家の協力で行われたこの公演を、「戦後の偉大なアーティスト集団」と語っている。また、50年代から現在に至るまでの多くのシャラの振付作品の映像の一部を見る事が出来た。

この映像からの最も大きな収穫は、当時 21 歳のシャラがバレエ・デ・シャンゼリゼに振付けをした《カルタ遊び》*Jeu de Cartes* (1945) の後年の再演映像である。ジャン-シャルル・ジル Jean-Charles Gill がジョーカー役を踊っている以外のダンサー名やカンパニーは不明ではあるが、カラー映像であることから 70 年代以降と考えられる。作品の一部抜粋ではあったが、トランプのそれぞれの役割を役に当てはめた衣裳のダンサー達がストラヴィンスキーの音楽に合わせて軽快に踊る。最もソロ、そしてジャンプが多く活躍するのは、もちろんジョーカーである。当然だが、当時の写真のイメージよりもジョーカー役がはるかに躍動的であることが確認できた。また、装置はこの時の公演では照明によって舞台一面を緑色にし、背景も緑と赤い口にしてトランプのイラストを映し、初演の装置のイメージを再現しようとしていた。リビオはインタビューで、この作品でジャンヌの振付を「天才的」と話す。

一方、後者の映像は、それぞれ 7 点の映像が取り込まれており、最初のテレビ番組でのインタビュー以外は舞台作品ではなく映像のためにスタジオ撮影された作品であった。以下に示す通りである。

1. テレビニュース *Actualités* : シャラへのインタビュー映像
2. ショパンのバラード *Ballade de Chopin* (1951)
3. 愛の夢 *Rêve d'amour* (1951)
4. 昼と夜 *Le jour et La nuit* (1950)
5. 時の流れ *The March of Time* (1952, ballets de France)
6. シャンゼリゼのアメリカ人 *Une Américaine aux Champs-Élysées*
7. ドガの踊り子 *Degas Ballerina* (1947)

やはりシャラへのインタビューからは、プティとの思い出などを語る場面や、振付作品の再演映像などの貴重な映像を確認することが出来た。そして、多くの作品を振付けしているシャラだが、最もフランスで有名であった時代の 1950 年代付近の作品を 6 点見ることによって、シャラの叙情的で女性的な、かつ表情豊かなコミカルさを感じ取ることができた。

また、シネマテーク・ド・ラ・ダンスのスタッフのご好意により、INA と Gaumont Pathe archives というフランスの映像検索サイトからバレエ団に関するテレビ映像を検索し、視聴することが出来た。フランスの過去のテレビ番組を検索出来る INA については知っており過去に検索をしていたが、バレエ・デ・シャンゼリゼに関する映像は出てこなかった。しかし、そのスタッフによると、どちらのサイトも有料の会員登録をすることにより、より詳細な検索が可能であるという。スタッフが会員になるための料金は高いので、自分のアカウントで検索すると良い、とその場で提案をして下さり実現可能となった。

後者の web サイトには《若者と死》*Le jeune homme et la mort* (1946) の映像しかなく、それは既知のものであった。

INA のサイトからは、非常に貴重なテレビニュースの中のバレエ団に関する映像を 5 点視聴することができ、それは大きな収穫であった。下記の通りである。

1. パリの新しいもの *Les nouveaux de Paris* (番組名 *Les Actualités Françaises: Paris*, 19/10/1945, 01MIN 12SEC) 新しいバレエ団の紹介バレエ・デ・シャンゼリゼの稽古風景。
2. サルブルッケンにいるバレエ・デ・シャンゼリゼ *LES BALLETS DES CHAMPS ELYSEES A SARREBRUCK* (*Les Actualités Françaises*, 30/10/1947, 数秒) ツアー中のドイツのサルブルッケンのこと
3. パリのクチュールとバレエ・デ・シャンゼリゼ *COUTURE PARISIENNE ET BALLETS DES CHAMPS ELYSEES* (*Affiche Ballets des Champs Elysées*), (*Les Actualités Françaises*, 01/01/1948, 05SEC) 新作の 13 の踊りのバレエ団のポスター
4. パリのクチュールとバレエ・デ・シャンゼリゼ *COUTURE PARISIENNE ET BALLETS DES CHAMPS ELYSEES* (*JOURNAL NATIONAL Rubrique: "LA SAISON DE PARIS"*) (*Les Actualités*

Françaises,01/01/1948,2MIN 52SEC) バレエ団のパリ・シーズンの新作《13の踊り》の映像。

5. ベルリンにいるパリのバレエ・デ・シャンゼリゼー団 La troupe des ballets des Champs Elysees de Paris à Berlin (Kurfurstendazm,01/01/1949,29SEC) ベルリンにツアー中のバレエ団の PR

Les Actualités Françaises は、1945年1月から1969年2月に放送されていたフランスのニュース番組であり、それぞれ数分秒の映像ではあるが、バレエ・デ・シャンゼリゼが当時のニュース番組で取り扱われていた。それらテレビ・ニュース番組からは、やはりバレエ団が注目されていた存在であったことが読み取れる。

また、《13の踊り》の舞台映像により、装置や衣裳などがわかり、アルルカンの格好をした男性などサーカスのようなお祭りの雰囲気を出していることがわかった。滞在中に調査した作品の内容とともに、この作品に関して知り得たことは多かった。

### 3. 公共情報図書館での本の閲覧と複写

ポンピドゥー芸術文化センター内には、公共情報図書館 (Bibliothèque Publique d'Information) がある。そこは開架式図書館であり、誰でも無料で閲覧することが可能な場所である。筆者は購入できない古い本や、重過ぎて現地で購入するのを躊躇する本を数点、一部複写をした。

### 4. 考察

舞踊評論家のイレヌ・リドヴァシャラとプティはサル・プレイエルにて舞踊評論家のイレヌ・リドヴァの主催によるリサイタルを1942, 1943, 1944年の3度開催した。2人は舞踊に関心のある人々の間で神童と呼ばれ、最初のリサイタルこそ大きな成功には至らなかったが、3回目の公演では成功を収めた<sup>11</sup>。

プティは2回目のリサイタルの稽古の時には、シャラのダンスに対する思想を、「私の目指す方向と美学的に一致したわけではなかった。シャラの世界は苦しみのそれで、正確には私が表現したいものとは違うもの」<sup>12</sup>と感じ取り、よりプティ自身の色を濃くした作品を発表した。当時、プティはアメリカ文化に憧れ、アメリカの映画やジャズ、ミュージック・ホールのレビューに夢中であった。その影響は次第にプティの作風に反映され、プティは作品にレビュー的要素を取り込むようになる。また、その娯楽性や壮さや斬新さ、エロティックな面が後にプティを世界的に有名にしたとも言える。シャラの振付作品にも娯楽性の高いものはあったとしても、プティに比べるとより内面性に重きを置き、叙情的であったと言えよう。

本調査で閲覧した当時の新聞評の中には、前述したように、1946年に「バレエ・デ・シャンゼリゼは宮廷バレエの格調高いスタイルとミュージック・ホールのアクロバティックなスタイルを調和させて組み合わせている」という報告がある。以上の記事からも、すでに当時のプティの振付の特徴が、後世の振付スタイルと変わらないことがわかる。それらの特徴はシャラとのリサイタルの時には始まっていたと言えよう。

つまり、プティの振付スタイルはすでに46年にはクラシック・バレエとミュージック・ホール、すなわちレビュー的要素を混合させたものであった。また、その振付が恐らく巧妙で、プティ自身の踊りも優れて魅力的だったために、批評家や知識人達もすぐに受け入れることが出来たのだろう。前衛性、斬新さがあったというよりは、クラシック・バレエを基本にしつつも人々を楽しませる、洒落て色気のあるキャバレー的要素を取り込むことに成功した。プティはそうすることによってバレエを侮辱したとも言われることなく、どちらかという、バレエの敷居を下げたとも言えるのではないか。舞台があり、観客の入る劇場小屋という点では共通点があるが、それがムーラン・ルージュではなく、シャンゼリゼ劇場で行われることで人々を魅了した。

《13の踊り》もそれら娯楽要素を取り入れた作品であったということが、今回の調査の新聞評と映像視聴により明らかとなった。

バレエ・デ・シャンゼリゼの創作した作品の中でも現在も再演され続けているのは《旅芸人》、《ランデヴー》、《若者と死》である。今回の調査によって現在は再演されていないものの、バレエ団が解散した後も他のカンパニーによって再演されていた作品《カルタ遊び》と《復讐》を知ることが出来た。恐らく、他の作品も他のカンパニーに引き継がれている可能性がある。さらには当時のテレビニュースに登場するバレエ団の映像の中に《13の踊り》を見つけ、シャラのドキュメンタリ映像からは《カルタ遊び》の再演を見る事が出来たことで、他の再演映像も見つかる可能性がある。今後も調査を続けたい。

## 5. 今後の研究へ

本調査は移動時間などを除いて実質 8 日間ではあったが、以上のように収穫の多い調査となった。事前に作成していたが不完全であったバレエ・デ・シャンゼリゼに関する年表とレパートリー表をより充実させることが可能となった。今回の調査では、日本に存在しない、また入手不可能な資料を閲覧した。

バレエ・デ・シャンゼリゼについては研究が充分になされていないため、筆者の学位論文での主要テーマとなる。本調査による研究は恐らく学位論文（博士論文）執筆の第 3, 4 章をしめるであろう。

今後は今回の調査研究で得たバレエ団の資料に基づき、収集した一次資料を読み解き、検討と考察をすることにより、バレエ団の全貌を明らかにした上で、このバレエ団の舞踊思想や、1930-40 年代という時代性を考慮して同バレエ団のフランス舞踊史における功績や位置づけを考察する。

もちろん、このバレエ団の作品の創作にはバレエ・リュスや他の文化の影響も多大にあると考えられるため、バレエ団の作品を考察する上でバレエ・リュスの作品の調査や同時代の他の文化の研究も必要である。さらに、バレエ団が与えた他のバレエ団、ダンサー、振付家の影響も考察したい。

本調査で現地での調査は最後にしたいと考えていたが、シネマテーク・ド・ラ・ダンスのスタッフに偶然バレエ・デ・シャンゼリゼのテレビ映像を検索して貰い、そのような偶然に感謝した。また、そのスタッフからは次回渡仏した折には（帰国前日に話しているため）、《出合い》を初演で踊ったレスリー・キャロンを紹介出来ると思うのでインタビューすると良い、との嬉しいコメントを貰い、やはりまだまだ調査することは残っているので再び訪れなければ、との気持ちを強くした。

筆者の研究は、時代性を考慮して同バレエ団の舞踊史における功績や位置づけを考察する点が独創的、かつ意義ではないかと考えている。このような研究を続けることは、現代の舞踊に引き継がれているもの、そして舞踊という芸術の持つ、人々に与える普遍的な価値について考究できると考える。その意味でも、今回の調査は国際的な女性リーダーの育成に関わる調査研究になったのではないかと自負している。

今回の調査に基づき、今年度の 12 月 1, 2 日に東京大学で開催される第 64 回舞踊学会大会にてバレエ・デ・シャンゼリゼの全貌に関する研究発表をする予定である。また、来年度 3 月末には学会誌『舞踊學』に論文を投稿する予定である。

## 注

1. Max FAVALELLI, 'AVEC L'ARGENT DU MASSIF CENTRAL ROLAND PETIT installe sa compagnie sur le plateau', *La Bataille*, 17-V-1948.
2. Dorothee SAINT MARC, 'Un restaurateur a restauré les plus beaux ballets du monde', *Noir et Blanc*, 18-XII-1946.
3. Maxime CADET, 'Roland Petit, future maître de ballet de l'Opera', *Ordre*, III-1946.
4. Jean SILVANT, 'Les nouveaux ballets des Champs-Élysées-L'Emotion du danseur', 出自不明 1946.
5. Maurice POURCHET, 'La chorégraphie', *Arts*, 15-III-1946.
6. Claude HERVIN, 'Les ballets des Roland PETIT', Paris-Presses, 15-XI-1947.
7. Claude De MANDRES, 'Valse des Millions', *Noir et Blanc*, 19-XI-1947.
8. Pierre MICHAUT, 'Descendu de Tabrin: Marcel Berger lance avec Solange Schwarz, aux Ballets de Roland Petit, sa première création de grand style', 出自不明 7-III-1946.
9. Irène LIDOVA (1992) *Ma vie avec la danse*. Edition Plume: Paris: 97.
10. Maurice BRILLIANT, 'Aux Ballets des Champs-Élysées', *L'aube* 27-X-1945; W,A, 'Le Déjeuner sur l'herbe' *Le Figaro*, 23-X-1945.
11. Marcel SCHNEIDER, *Danse à Paris-Ballets des Champs-Élysées Festival international*, (Paris, 1983), 13
12. Roland PETIT, 'L'Accord du mouvement et de la musique', Gérard MANNONI (ed.) *Roland Petit- Ouvrage conçu et réalisé*. (Paris, 1984), 36.

## 参考文献

- Beaumont, Cyril (1955) *Ballets: past & present*. Putnam: London.
- Bertrand Dorléac, Laurence Tr. to English by Jane Marie Todd (2008) *Art of the defeat : France 1940-1944*. Getty Research Institute: Los Angeles.
- BRASSAI (1964) *Conversations avec Picasso*. Editions Gallimard, Paris.
- Clair Sarah (1995) *Jean Babilée ou la danse buissonnière*. Van Dieren: Paris.
- Guest, Ivor (2001) *Le Ballet de l'opéra de Paris: trois siècles d'histoire et de tradition*. Éd. rev. et augm: Paris.
- Kochno, Boris (1954) *Le ballet avec la collaboration de MariaLuz*. Hachette: Paris.

- Kochno, Boris (1988) *Christian Bérard*, Thames and Hudson: London.
- Lidova, Irène (1992) *Ma vie avec la danse*. Edition Plume: Paris.
- Livio, Antoine (2004 (1970) *Béjart*. L'age d'Homme: Paris.
- Mannoni, Gérard (1984) *Roland Petit-Ouvrage conçu et réalisé*. L'avant-scéné Ballet/ Danse: Paris.
- Mannoni, Gérard (1992) *Roland Petit: Un Choreographe et ses danseurs*. Paris.
- Michaut, Pierre (1950) *Le ballet contemporain 1929-1950*. Plon: Paris.
- Minyama, Philippe (1998) *Jean Babilée*. Marval: Paris.
- Pastori, Jean-Pierre (1997) *La danse, des Ballets russes à l'avant-garde*. Gallimard: Paris.
- Petit, Roland (2003) *Roland Petit: rythme de vie: entretiens avec Jean-Pierre Pastori*. La Bibliotheque des Arts: Lausanne.
- Petit, Roland (1993) *J'ai dansé sur les flots*. Grasset: Paris.
- Schneider, Marcel, Michel, Marcelle, Robin, Jean (1983) *Danse à Paris-Ballets des Champs-Élysées Festival international*. Dell'arte: Paris.
- Williamson, Audrey (1958) *Ballet of 3 decades*. Rockliff: London.
- Aloff, Mindy (1983) REVIEW. *Dance magazine* 11:20-26.
- Bonnat, Yves (1945) Les Ballets des Champs-Élysées. *Peuple* 27.10.
- Bonnat, Yves (1947) Les Ballets des Champs-Élysées-des Souvenirs et des projets, *La Revue de la Danse* no.2.
- Buckle, Richard (1948) Les Ballets des Champs-Élysées. *The ballet annual* v.2:90-97.
- Christout, Marie-François (2004) Les Ballets des Champs-Élysées: A Legendary Adventure, *Dance Chronicle*, Vol,27 : 157-198.
- FAVALELLI, Max (1948) AVEC L'ARGENT DU MASSIF CENTRAL ROLAND PETIT installe sa compagnie sur le plateau. *La Bataille* 17.05.
- Hervin, Claude (1945) «Le Rendez-vous», «Les Forains» et une œuvre inedited de Strawinsky...seront au programme des "Ballets des Champs-Élysées", *Paris-Presse*, 3.10.
- Hervin, Claude (1946) 'Après avoir séduit le "Tout-Paris" Evadé de L'Opera : Roland Petit va faire briller a Londres', *Paris-Presse*, 6-IX-1946.
- Hervin, Claude (1946) Après avoir triomphé en Angleterre: Les Ballets des Champs-Élysées danseront ce soir au Festival de l'U.N.E.S.C.O. *Paris-Presse* 25.11.
- Joly, G (1945) Les Ballets des Champs-Élysées. *L'Aurore* 17.10.
- Jourdan-Morhange, Hélène (1945) Ballets" des Champs-Élysées. *Fraternité* 24.10.
- J.Pendleton, Edmund (1947) Music in Paris-Ballets des Champs-Élysées. *Herald Tribune* 15-11.
- LASSEAUX, Marcel, 'Costumes de Danse', *Images de France*, 1944.
- Lugnet, René (1945) Les Ballets au theatre des Champs-Élysées. *L'Ordre* 16.10.
- Luquet, René (1945) Les "Ballets" des Champs-Élysées. *Ce Soir* 20.10.
- Manuel, Roland (1945) Les Ballets des Champs-Élysées. *Combat* 16.10.
- Manuel, Roland (1945) La Danse : Les Ballets des Champs-Élysées. *Les Lettres Françaises* 27.10.
- Manuel, Roland (1946) La Musique: Les Ballets de Roland Petit. *OPÉRA* 20.02.
- Merlin, Olivier (1947) La Danse: Le Portrait de Don Quichotte et Les Ballets des Champs-Élysées. *Une semaine dans le Monde* 29.11.
- Pourchet, Maurice (1946) La chorégraphie. *Arts* 8.03.
- Pourchet, Maurice (1946) La chorégraphie. *Arts* 15.03.
- Pourchet, Maurice (1947) Les Ballets des Champs-Élysées. *Arts* 21.11.
- Sauguet, Henri (1945) Soirées de Ballets. *La Bataille* 28.06.
- Sauguet, Henri (1945) La Danse: Les Ballets des Champs-Élysées. *Paris-Presse* 25.10.
- Silvant, Jean (1945) Les Ballets des Champs-Élysées. *Spectateur* 17.10.
- Silvant, Jean (1946) Les Nouveaux Ballets Des Champs-Élysées. *Spectateur* 6.03.
- Silvant, Jean (1946) 'Les nouveaux ballets des Champs-Élysées-L'Emotion du danseur'.

#### Program

- Recital de Danse*. 15.04.1943: Paris.
- Soirée de Ballets*. 22.12.1944: Paris.
- Soirée de Ballets* Ed.Chêne.06.1945: Paris.
- Les Ballets des Champs-Élysées* Ed.Mercure.12.10.1945: Paris.
- Les Ballets des Champs-Élysées* Ed.Mercure.17.03.1946: Paris.
- Les Ballets des Champs-Élysées* 1946 Ed.Mercure.05.04.1946: Paris.

*Les Ballets des Champs-Élysées*1946 Ed. Aljanvic.1946: Paris  
*Les Ballets des Champs-Élysées*1946-1947 Ed.Aljanvic.19.12.1946: Paris.  
*Les Ballets des Champs-Élysées*1948 Ed.Mercure.06.11.1948: Paris.  
*Les Ballets des Champs-Élysées*1949 Ed.Mercure.19.04.1949: Paris.  
*Les Ballets des Champs-Élysées* 1949-50 Ed.Mercure.7.11.1949: Paris.  
*Les Ballets des Champs-Élysées* Ed.Mercure.12.06.1950: Paris.  
*Les Ballets des Champs-Élysées*1951 Ed. Mercure.3.10.1951: Paris  
*Ballet de L'opéra Picasso et la danse* 1993 : Paris.  
*Ballet de L'opéra Roland Petit* 9.2010: Paris.

ふかさわ なつみ／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻

### 指導教員によるコメント

深澤南土実さんの海外調査研究は、パリ・オペラ座附属図書館におけるバレエ・デ・シャンゼリゼに関する全史料を網羅することが目的であった。これまで2回の調査によってバレエ・デ・シャンゼリゼに関する当時のプログラム等の史料は収集できていたが、本調査においてはアーティスト・ファイルや作品ファイルの閲覧を通してより詳細な史料の収集を試みた。また、シネマテーク・ド・ラ・ダンスにも連絡を取り、バレエ・デ・シャンゼリゼとローラン・プティに関連する映像の視聴も行えたことも、博士論文執筆に関して非常に有益な収穫であったと考える。本調査で得られた史料を用いた研究は、博士論文の中核をなすものになるであろう。また、12月に開催される第64回舞踊学会大会で発表を予定している。さらに、この研究を深化させることによって舞踊学への貢献を期待している。

(お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科 (文化科学系)・猪崎 弥生)

<b>学生海外調査研究</b>	
<b>コミュニケーション方略の明示的指導の実践報告 —中国国内の中国人日本語学習者を対象に—</b>	
方 穎琳	比較社会文化学専攻
期間	2012年8月24日～2012年9月27日
場所	中国広東省
施設	広東外語外貿大学

## 内容報告

### 1. 海外調査研究の必要性及び目的

グローバル化が進むにつれ、日本語教育の重点は文法知識の指導からコミュニケーション能力の育成に変わりつつある。日本語学習者数が世界第2位の中国では、2009年には学習者数が約83万人に達し、その内、6割以上は高等教育機関（大学）で日本語を専攻、あるいは非専攻第二外国語として勉強している学習者である<sup>1</sup>。最新の高等教育シラバスでは、日本語教育の最終目標として、「日本語教育を用いて実際にコミュニケーションする能力の獲得」を掲げている。これは、日本語によるコミュニケーションをより自然に行うためには、文法的知識や語彙を増やし、それを正確なものにするだけでは不十分であるという認識に基づいているからである。その目標を達成するために、中国人学習者のレディネスとニーズを重視する教材開発が進んでおり、コミュニケーション場面を想定した会話教材も開発されている（曹 2011）。

日本語を媒介言語とする接触場面では、第二言語（以下「L2」）学習者は言語知識の不足に起因する問題を修復し、会話の進行を維持するために、コミュニケーション方略（Communication Strategies, 以下「CS」）が用いられる。CSはコミュニケーション上の問題を解決する手段だけではなく、コミュニケーションの効果を高める目的でも使われている（Canale1983）。Canale（1983）はCSをコミュニケーション能力（文法的能力、社会言語学的能力、談話能力）の一つに捉え、他の3つの能力より実際のコミュニケーションに関わる能力であると指摘している。また、CSによってL2学習者は実際の能力よりも高い能力を発揮でき、自己のコミュニケーション能力を伸ばすことができる（Swain1984）。

これまで、日本語学習者のCSの使用実態（種類、使用頻度、成功率）についての実践的研究が多く行われてきた（藤長 1996；方 2010ほか）。方（2010）は学習歴の異なる中国人学習者が使用したCSを考察したところ、学習歴にかかわらず学習者は相手の母語話者と協力して問題解決を図るより、自ら様々のCSを使用して問題解決をしようとする特徴が見られた。また、田・林（2009）はディベート、自由討論などの会話資料をもとに中国人日本語学習者が使用したCSを考察した結果、習熟度に関わらず学習者は中国語に依存することと、日本語による置き換え、説明などのCSはほとんど使わず、同じ言葉の繰り返しが多いことを主な問題点として挙げている。さらに、L2習熟度が上級（日本語能力試験1級）に達しても、中国人学習者は実際のコミュニケーション問題に対応するときにCSについて認識が薄く、効率的にCSを使用することはできないとも指摘している。

「CSの教育により、学習者の言語運用能力が伸びる」という仮説の下に、実際の教育現場にCSを指導する試みも多く見られる。まず、金・赤堀（1997）はトレーニングによる方略能力の向上が、コミュニケーション能力の向上との間にプラスの相関があることを検証した。次に、椿（2010）はCSとしての「聞き返し」の教育を中級の会話クラスで実践し、その前後の学習者と母語話者との会話で見られた「聞き返し」を量・質的に分析した結果、半数の学習者は教育前には使えていなかった「聞き返し」が教育後の会話では意識的に使えていることを報告している。また、教育後の会話では、質的により望ましい「聞き返し」が使えており、会話交換が活発になったことも明らかになった。また、李（2006）はJFL（Japanese as a foreign language）学習者同士の相互作用という文脈からCS指導をデザインし、CS授業前後で学習者の発話を実験群と統制群とで比較する方法をとり、授業の記録と学習者の自己報告を加えCS指導の効果を分析した。その結果、CSの指導によって学習者は、（1）CSが実際のコミュニケーションにおいて果たす役割を理解し、CSを使うようになる、（2）自

信を持って積極的にコミュニケーションに参加できるようになる（発話量が増加）、(3) L2 習得を左右する、アウトプットとインプット、そして相互交渉の機会が増える、ということが明らかになった。

しかしながら、これらの CS 指導の実践にはまだいくつかの課題が残されている。まず、実践の対象者の選定について、対象者の属性（学習歴、国籍）が統一されていない場合があり、L2 習熟度の測定も行われなかった場合もあるため、学習者のレベルに適した指導のあり方を検討するには困難がある。次に、指導方法に関して問題点としては、CS 学習意義について理解を促すときに学習者自身の経験を活かさなかったことと、学習者に十分な考える時間やヒントを与えずに教師が有効だと思われた CS の使用方法を直接的に提示することが挙げられる。また、指導の教材には、学習者がまだ習得していない語彙や言い方が含まれているため、新しい語彙の習得に時間がかかり、実際の CS 使用の練習時間が足りなかったことも見られた。

このように、以上の実践研究の成果を中国における日本語教育の現場、特に会話授業に取り入れるためにはまだ改善する余地があると考えられる。冒頭でも述べたように、最近、中国人学習者のニーズを重視し、コミュニケーション場面を想定した会話教材も開発されているが、それらの教材には CS 指導法が取り入れたものはまだ見当たらない状態にある。そこで、本実践では、中国における日本語教育の状況と中国人学習者の CS 使用の特徴を踏まえ、先行研究の良い点と改善すべき点を十分に考慮した上で実践を試みることを通し、JFL 環境における中国人学習者に適した CS 指導の方法を検討することを目的とする。

## 2. 海外調査研究の概要

### 2.1 教授実践の対象者

実践の対象者は、中国の国内の大学に在籍する日本語専攻の学習者である。学習者の選定については、まず、筆者が当該大学の 2 年生と 4 年生に CS 指導実践の概要を説明し、「CS 授業に参加したい」を示した学習者を選出した。次に、学習者の日本語能力の測定を行った。学習者全員に SPOT テスト (A 紙)<sup>2</sup> を実施し、採点に  $t$  検定を行った結果（平均値及び標準偏差）に基づき習熟度の低群、高群の 2 群に分けた ( $t=10.6, p<.001$ 、以下「実践低群」、「実践高群」)。計 26 名の学習者が実践の対象者として選出された（実践低群が 16 名、実践高群が 10 名）。そして、実践効果を明らかにするために、事前の意向調査において「CS 授業に参加したい」と示さなかった学習者から 20 名を選び、統制群に設定した。また、実践対象者にフェスシートを記入してもらった。具体的な対象者の概要を表 1 に示す。

表 1 実践対象者の概要

	人数	性別	平均年齢	L2 習熟度	学習歴	SPOT 平均得点 (標準偏差)	接触頻度	備考
実践群	16 名	男(1名) 女(15名)	18 才	低	1 年	41.7 (4.0)	低	滞日経験なし；同じクラス；CS 学習経験なし
	10 名	男(1名) 女(9名)	21 才	高	3 年	58.5 (4.5)	低	全員日本語能力試験 N1 合格；滞日経験なし；同じクラス；CS 学習経験なし
統制群	10 名	男(1名) 女(9名)	18 才	低	1 年	40.8 (3.9)	低	滞日経験なし；同じクラス；CS 学習経験なし
	10 名	男(1名) 女(9名)	21 才	高	3 年	59.0 (3.7)	低	全員日本語能力試験 N1 合格；滞日経験なし；同じクラス；CS 学習経験なし

### 2.2 事前テストと事後テスト

CS 指導の効果を分析するために、CS 授業の前後に概念識別タスクを行い、分析データとした。タスクを実施している様子を IC レコーダーとビデオカメラで記録した。具体的な内容、方法は以下の通りである。

実践高群と実践低群それぞれにタスクを実施した。まず、学習者に自由に 2 人ペアになってもらい、役割（説明する役／当てる役）を決めてもらった。説明する役の学習者に単語リスト A を配り、15 秒ほど準備時間を与えた上で中国語で指示した。指示の日本語訳は次の通りである。

「単語リスト A に書いてある 6 つの単語を 6 分以内に相手に説明してください。挙げられた単語そのものを使わずに、単語の意味などを別の言葉、表現で説明してください。相手を初対面の日本人だ

と想像し、できるだけ日本語を使用して下さい。」

次に、当てる役の学習者に中国語で指示を与えた。

「(日本語訳) 6分間の間に相手が説明した6つの単語を当ててください。日本語でその単語を言えない場合、中国語で答えても構わない。」

6つの単語がすべて当てられた時点、または6分が経過した時点で役割(説明する役/当てる役)を交替し、単語リストBで同様にタスクを行った。また、事前テストと事後テストを異なる単語リストでタスクを実施した。単語リストの作成は、李(2006)と吉田・西村(2011)を参考にした。実践低群と実践高群それぞれに与えた単語リストは表2に示す。

表2 事前テスト・事後テストの単語リスト

	事前テストの単語リスト		事後テストの単語リスト	
	A	B	A	B
実践低群	押しピン(図釘) すいか(西瓜) 蚊(蚊子) ゴルフ(高尔夫) 熊(熊) 祭り(祭祀活动, 节日)	栓抜き(开瓶器) みかん(橘子, 桔子) 蝶々(胡蝶) 野球(棒球) 象(象) 凧揚げ(放风筝)	懐中電灯(手电筒) イチゴ(草莓) ハエ(苍蝇) バレーボール(排球) パンダ(熊猫) 成人式(成人仪式)	浮き輪(游泳圈) キウイ(猕猴桃) ゴキブリ(蟑螂) バトミントン(羽毛球) 馬(马) 花火大会(烟火大会)
実践高群	押しピン(図釘) ショウガ(姜) 袖(袖子) ベテラン(老手, 内行) 鹿(鹿) コオロギ(蟋蟀)	栓抜き(开瓶器) タマネギ(洋葱) 襟(领子) エキスパート(专家) 鯨(鲸鱼) コガネムシ(金龟子)	蚊取線香(蚊香, 驱蚊器) イチゴ(草莓) ハエ(苍蝇) ストライキ(罢工) シマウマ(斑马) 預金(存钱)	雨具(雨具) キウイ(猕猴桃) ゴキブリ(蟑螂) インフレ(通货膨胀) ウミカメ(海龟) 会計(结账, 付款)

### 2.3 実践の設定

本実践は2012年9月8日から24日までの間に行った。事前・事後テストを含め計5回の授業を行ったが、そのうち、具体的なCS指導を行ってタスクを実施したのは中間の3回となる(表3を参照のこと)。なお、新学期が始まったばかりの学習者への負担を最小限に抑えるために、平日の夜または休日、1回60分程度で授業を行うことにした。授業の様子をICレコーダーとビデオカメラで記録した。また、タスクを実施する際に学習者にワークシートを配布し、授業後にワークシートのコピーを取った。

表3 実験群のCS指導スケジュール(CSの指導項目は方(2012)を参照)

	学習内容	CS指導項目
第1回	事前テスト、CSの概観	CSの定義、分類、基礎理論の説明
第2回	自己解決型CS-I	「置き換え」ストラテジーを中心に指導。
第3回	共同解決型CS	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「理解促進」ストラテジー(確認要求聞きとりなかった、または分からなかった母語話者の発話を聞き返す)</li> <li>・「完成要求」ストラテジー(直接的/間接的に母語話者の援助を求める)</li> <li>・「理解確認」ストラテジー(母語話者に語彙や形、また文レベルの理解の確認を求める)</li> </ul>
第4回	自己解決型CS-II、総復習	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「再構成/言い直し」ストラテジーの指導</li> <li>・自己解決型CS、共同解決型CSの復習</li> </ul>
第5回	事後テスト、学習者の感想を聞く	

### 2.4 CS指導授業の詳細

CS指導授業のデザインは主に池田・館岡(2007)による「ピア・ラーニング」という理念を参考にして設定した。池田・館岡(2007)によれば、「ピア・ラーニング」とは、文字通りにはピア(peer: 仲間)と学ぶ(learn)ことであるが、対話をとおして学習者同士が互いの力を発揮し協力して学ぶ学

習方法である。ピア・ラーニングにおいてもっとも重要な概念は、「協働」、つまり、人と人が互いに力を出し協力して創造的な活動を行うことである。ピア・ラーニングは其中で相手が仲間（クラスメート）である場合に限定し、とくに教室場面での学習を想定している。そして、仲間同士の対等で互恵的な関係の中で、互いに貢献しあい学ぶことを通し、学習者の内省、すなわちメタ認知を促し、自律的学習能力を育成することに貢献すると考えられる。接触場面のコミュニケーションを想定したCS指導授業では、IRE (initiation-response-evaluation) と呼ばれるように教師の質問—学習者の反応—教師の評価という教師主導の形でCSのモデルを教えるだけでは、学習者による主体的に学び、考えることを促すには困難があるのではないと思われる。言い換えると、学習者が自分自身の経験を振り返るとともに、場面の状況を読み取り、自ら有効な問題修復方法を模索することで、教師から一方的に指導を受けるより、自分に適したCS使用の方法を熟考する機会が得られると考えられる。さらに、進行中のコミュニケーションに生じた問題について、相手である母語話者と協働して修復に取り込むという相互作用におけるCSの機能が、社会的相互作用を重要視している「ピア・ラーニング」と共通していることから、CS指導においては「ピア・ラーニング」の学習方法を利用できるのではないかと考えられる。

したがって、本実践では、クラスメートである実践群の学習者に「ピア」(2人)の形でCSの授業に参加してもらい、タスクを行った。授業の内容と流れは次の通りである。

- ①プレタスク (前回の宿題の説明、ウォーミング・アップ、およそ10分)
  - ・授業の流れを説明する。
  - ・実際の接触場面での会話例を示し、その会話に見られたCS使用の良い点/良くない点についてピアでディスカッションしてもらい、クラス内で発表する。
- ②タスクⅠ：CSの提示・使用例の説明 (CSの意識化、およそ20分)
  - ・CSの使用モデルを提示、説明し、学習者にCSの性質とコミュニケーション上の役割を意識させる。
- ③タスクⅡ：実践 (CSの練習、およそ25分)
  - ・提示したロールプレイトスクを行わせ、ピアごとの発表をクラス内で行う。
  - ・教師によるフィードバックを与える
- ④まとめ：習ったCSについて簡単にまとめる (CSの復習、およそ5分)
- ⑤宿題：オープンアンサーの質問 (2つ) を考える；CS学習について振り返りを行う。

振り返り活動は学習者にメタ認知トレーニングシートを配り、CS学習についての評価する形で行った。メタ認知トレーニングシート (表4) の質問項目は中国訳が付き、回答は5件法 (a.とてもそう思う b.まあまあそう思う c.どちらとも言えない d.あまりそう思わない e.ぜんぜんそう思わない) で選択するものと自由記述のものを設けた。

表4 メタ認知トレーニングシートの質問項目 (中谷2005を参照)

- 
1. この活動の目的が達成できたか？ (你觉得在多大程度上达到了这次活动的目的?)
  2. 話している時に表現できないことはあったか？/聞いている時に分からないことがあったか？もしあるとしたら、どのようなことか？ (在表达时有说不出的情况吗？在听的时候有听不懂的情况吗？如果有的话请举例说明)
  3. 今日の授業で習ったCSを使ったか？ (用了今天学的CS吗?)
  4. 今日の授業で習ったCSを使って表現できないことが表現できたか？/わからなかったところがわかったか？もしあるとしたら、どのようなことか？ (用了今天学的CS以后原来无法表达的内容能表达了吗？没听懂的内容能听懂了吗？如果有的话请举例说明)
  5. 今日習ったCSが上手に使えたと思うか？ (觉得有效地使用了今天学的CS吗?)
  6. 次の会話練習の時、同じような問題が生じた場合、今日習ったCSを使おうと思うか？ (下次练习会话的时候如果出现同样的问题，会想使用今天学的CS吗?)
  7. この活動で自分と会話の相手がよくできたことと、よくできなかったことはあるか？ (请介绍下这次活动中你自己和你的搭档做得不错的方面和做得还不够的方面。)
- 自由に書いてください (请自由填写)。
- 自分がよくできたこと (做得不错的方面) :                      よくできなかったこと (做得不够的方面) :  
 会話の相手がよくできたこと (做得不错的方面) :                      よくできなかったこと (做得不够的方面) :
- 

## 2.5 研究の進捗

現段階では、まず事前・事後テストの概念識別タスクの会話を文字に起こし、分析データとするプロトコルの準備作業を行っている。次に、学習者のメタ認知トレーニングシートの結果をまとめ、統

計処理を行っている。また、授業の記録（3回のCS授業のワークシート、録画映像）を観察し、一部を文字化している。

以上のデータを用い、主に次の2点において分析を行う予定である。

1) CSの指導の結果、CSをより効果的に使用できるようになるのか。

ここでは、事前・事後テストにおいての説明に使用されたCSの種類、使用頻度、効率性（L2語彙の豊かさ、聞き返しの明瞭さ、発話の量）から量的に考察する。

2) CSの指導前後、学習者がCSについての意識は変化するか。

ここでは、メタ認知トレーニングシートの結果に基づき、学習者がCSについての意識の変化について考察する。

また、授業の記録（3回のCS授業のワークシート、録画映像）を観察し、教師として気づきのある点について質的に考察し、CS指導法を検討する。

### 3. 本調査研究が博士論文における位置付け

筆者の博士論文では、中国人日本語学習者のCS使用の全貌を解明することと、中国の日本語教育へ提言できることを研究目的に定め、以下の6つの研究を行う予定である。

まず、【研究1】（修士論文、方2010）で学習者のCS使用の実態を把握した上に、【研究2】ではCSの使用の原因となる学習者の言語知識の問題とCS使用の関連性を考察する。そして、【研究3】（方2012b）では意味伝達問題とCSの連鎖、母語話者の反応と学習者の調整からCS使用の効果、【研究4】では学習者のCS使用についての会話当事者の評価を対象に分析を行う。さらに、【研究5】（方2012a）では研究1～4まで見られた学習者のCS使用の問題点に焦点を当てて考察する。そこから明らかになったことを中国の大学の日本語教育現場に取り入れ、教育実践を通して中国人学習者に適応するCSの指導法を【研究6】で提案する。最後に、これらの研究の結果を博士論文にまとめ、より全面的に中国人日本語学習者のCS使用の様相を解明したいと考えている。今回の調査研究は【研究6】に位置付け、博士論文の研究結果と実際の教育現場での指導に結びつく重要な一環になる。

### 4. まとめと今後の予定

本実践は、2011年度の「国際的に活躍する女性リーダー育成」推進事業の支援により中国人日本語学習者を対象に、これまでの筆者のCS研究から得られた示唆を活かし、接触場面のコミュニケーション特徴を重視し、学習者の自立学習能力を促す「ピア・ラーニング」の概念を取り入れたCS指導を試みた。準備段階を含めおよそ1カ月の間に、筆者が中国の高等教育機関（大学）の日本語教育現場に立ち、日本語専攻の学習者にCSの指導を行いながら、効果的なCS指導の方法について考察を続けていた。これからは、今回の調査研究で得られた貴重なデータを処理・分析し、そこから得られた知見を今後の中国での会話教育にどのように取り入れたら良いかを考えていきたい。

今回の調査研究の結果を日本語教育学会の研究大会で発表し、また、日本語教育学会の学会誌『日本語教育』に投稿して、研究論文の形で公表したい。執筆予定の論文名は「中国人日本語学習者（JFL）へのコミュニケーション方略の指導—ピア活動を取り入れた指導からの一考察—」である。

### 注

1. 国際交流基金による「2009年海外日本語教育機関調査」のデータを参考にした。
2. 日本語能力簡易試験（Simple Performance-Oriented Test: SPOT）は簡単に短時間で日本語能力を測定することを目的に筑波大学で開発された。SPOTテストのうち、上級向けのA版と初・中級向けのB版が使用申請のあった個人（研究用）や機関（プレースメント用）に用いられている。本実践で使用したのは難易度の高い「SPOT-A紙」で、満点は65点である。

### 参考文献

- 池田玲子・館岡洋子（2007）『ピア・ラーニング入門—創造的な学びのデザインのために』ひつじ書房
- 李賢珍（2006）「コミュニケーション方略の明示的指導が学習者同士の学習活動に与える効果—韓国人日本語学習者（JFL）を対象に—」『日本学報』69,83-97.
- 金シミン・赤堀侃司（1997）「日本語学習者を対象にしたコミュニケーション方略のトレーニング効果の分析」『日本語教育』93, 49-60.
- 国際交流基金（2012）『2009年海外日本語教育機関調査』結果（速報値）  
[http://www.jpff.go.jp/j/japanese/survey/result/dl/news\\_2009\\_01.pdf](http://www.jpff.go.jp/j/japanese/survey/result/dl/news_2009_01.pdf)（2012年10月27日参照）
- 曹大峰（2011）「内容と能力を重視した日本語教育へ向けて—中国語母語話者向けの新しい日本語教材の開発研究事例—」

『日本語/日本語教育研究』2, 253-286.

椿由紀子 (2010) 「コミュニケーション・ストラテジーとしての「聞き返し」教育」『日本語教育』147, 97-111.

中谷安男 (2005) 『オーラル・コミュニケーション・ストラテジー研究』開文社出版

藤長かおる (1996) 「初中級学習者のコミュニケーション能力についての一考察」『日本語国際センター紀要』6,51-69.

方穎琳 (2010) 「接触場面における中国人日本語学習者のコミュニケーション・ストラテジーの使用—意味伝達問題を解決するための達成ストラテジーを中心に—」『言語文化と日本語教育』39, 122-131.

方穎琳 (2012) 「中国人日本語学習者による語彙的問題を修復するためのコミュニケーション方略」『日本語/日本語教育研究』3,127-143.

Canale, M. (1983) From communicative competence to communicative language pedagogy. In Richards and Schmidt (eds.) *Language and Communication*. London: Longman. 2-27.

Swain, M (1984) Large-scale Communicative Language Testing: A Case Study. In S.J. Savignon and M.S. Berns (eds.) *Initiatives in Communicative Language Teaching: A Book of Readings*. Addison-Wesley.

田孝平・林燕燕 (2009) 「论日语教学中交际策略的培养」『新西部 (下半月) NEW WEST』2

吉松由美・西村恵子 (2011) 『一本突破新日语能力考试 N1 级 词汇』北京語言大学出版社

ほう えいりん／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻

### 指導教員によるコメント

方穎琳さんは、2012年8月末から9月末までの1カ月の間、中国（広東省）の大学で授業実践を行いました。今回の実践は、以下の三点において高く評価されます。まず、方さんのこれまでの研究の成果を十分に生かした実験授業である点、次に、実験協力者のレベル測定、授業の録音、録画など周到な準備をして精緻な分析に耐えうるデータを収集した点、最後にこれまで試みられることのなかった学習者の自律的学習能力を育てる「ピア・ラーニング」の指導法をCSの実践研究に取り入れた意欲的な実践である点です。

今後、今回の実践をまとめ学会発表や研究論文として公開することで、教師主導型の教授法が中心であると言われる中国において、中国人学習者向けのCS指導法のあり方、さらには実際のコミュニケーション場面で役に立つ日本語指導への貢献が期待されます。また分析結果は、博士論文に日本語教育現場への具体的な示唆として組み込んでいく予定で、博士後期課程3年次にふさわしい傑出した実践であると評価いたします。

(お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科 (文化科学系)・佐々木 泰子)

<b>学生海外調査研究</b>	
<b>民営中学受験からみる親の教育戦略の変化 —中国浙江省慈溪市の事例を通して—</b>	
馬 芳芳	人間発達科学専攻
期間	2012年9月1日～2012年9月14日
場所	中国 浙江省 慈溪市
施設	調査対象者自宅・勤務先、市内喫茶店、市内大手学習塾、某民営中学校

## 内容報告

### 1. 研究背景と目的

報告者は、博士後期課程において、親の教育戦略をテーマにして研究を進めている。教育戦略とは、片岡(2008)が指摘するように、フランスの社会学者ピエール・ブルデューの用いる「戦略」(Strategies)という概念を、教育に対して適用した造語であり、日常語の戦略とは意味を異にしている。片岡は、教育戦略には、「行為者の意図的な実践だけでなく、無意図的・無意識的に行っている実践」も含まれている、という。本研究では、片岡の定義を援用する。

近年、中国の沿岸地域では、日本と同様に受験の低年齢化現象が生じている。その背景には、中国社会全体の高学歴志向と、高学歴志向とは矛盾する教育資源配分の不均等問題(例えば、設備に関する学校間格差の存在)があげられる。そのため、中国では、学歴獲得競争の激しさが増す一方である。加えて、教育の市場化による学校選択制の導入や教育産業(例えば、学習塾や習い事教室)の隆盛が、良質な教育機会を自由に選択することを可能としたことにより、競争に勝ち抜く手段の多様化が進んでいる。したがって、学歴の獲得競争は、大学受験をめぐるだけでなく、中学受験や小学校受験といった初期の教育選抜にも広がりつつある。

しかし、選抜の時期が早ければ早いほど、決定権を握っているのは、子どもではなく、親となるため、高等教育段階の入学選抜に比べて、親の社会階層が反映される傾向がより強くなると考えられる(小針 2004, 422)。具体的には、例えば、学校選択にあたって、高額な費用を負担できる経済力(曲・楊 2007, 李 2008)や、子どもを学習塾に通わせたり(樋田 1993, 中西 2011)、自宅で学習支援を行ったりする意識・能力(多賀 2012)などが深く関わってくる。すなわち、Brown(1997)が指摘するように、「ペアレントクラシー」の到来により、教育の選抜や選択に関して、家族の資本の重要性が高まっており、教育における新たな不平等構造が生じていると言えよう。

このような研究背景を踏まえて、本研究は、民営中学受験<sup>1</sup>に焦点をあてて、親たちがどのような葛藤を抱え、どのようにして家族のもつ資本を最大化して活用するのか(=親の教育戦略)を、受験前(準備、希望)と受験後(結果、実際の選択)の変化を通して明らかにすることを目的とする。

## 2. 本海外調査の必要性と位置づけ

### 2.1 本研究に至る経緯

報告者はこれまで、一貫して中国浙江省慈溪市<sup>2</sup>をフィールドとし、量的研究と質的研究を行ってきた。

まず、博士後期課程2年次の前半までは、修士論文の質問紙調査のデータを用いた再分析を行った。その結果、親の意識(=親の教育期待, 馬 2010)と行動(=学校外教育投資, 馬 2011a, b)に顕著な学校間格差と階層間格差が存在していることが分かった。

次に、上記のような量的分析に肉付けをするために、博士後期課程2年次の後半からは、小中学生をもつ親を対象とした1回目の聴き取り調査を始めた。ここでは、文化資本や経済資本に、社会関係資本(=親の子どもとの接し方や親の持つネットワーク)を加え、家族による影響を検討した(馬 2011c)。用いたデータは、4人の対象者のうち、母親2人による事例である。残りの父親2人に関しては2回目以降の調査データと合わせて、今年度後半に分析を計画している。

また、博士後期課程3年次の4月から5月に、2回目の聴き取り調査を実施した。中国では、毎年

6月が中学受験のシーズンであるため、この調査は、主に子どもの民営中学受験の希望や準備に関する内容を扱った。調査対象は、学歴や職業の異なる小中学生の親、計28名であった。

さらに、博士後期課程3年次の9月に、3回目（本海外調査）の聴き取り調査を行った。

## 2.2 本海外調査の必要性

本海外調査が必要とされた理由には、以下の3点があげられる。

まず、1点目は、調査対象者を拡大するためである。上記項目で述べた2回目の聴き取り調査では、無学歴・小卒から大卒までのすべての学歴層を網羅した。この点は、対象者のほとんどが高学歴層に集中している、という先行研究の不足点を補うことができたといえる。しかし、彼らの職業を見た場合、高学歴層の親は、学校教員による事例しか収集できなかった。地域の現実を反映するためには、より多様な職業層の対象者を扱うことが要求される。そのため、今回は、学校教員のほかに、政府部門の幹部や医者、裁判官、企業の管理職などの対象者を取り入れた。また、低学歴層の場合は、2回目の調査で、調査地域の住民による事例しか集められなかったため、出稼ぎにきた農民工も今回は対象にした。

2点目は、調査内容の追跡である。2回目の聴き取り調査では、28名のうち6名が中学受験を控える小6の子どもの親であった。彼らの子どもの受験結果はどのようなものだったのか、その結果に基づいて、実際にどのような学校を選択したのか、最終選択は当初の希望と異なったのか、といった実態を明らかにする必要がある。

3点目は、客観的な情報収集のためである。例えば、なぜ多くの親が特定の民営学校を希望するのか、といったような行動をより正確に説明するために、親による話だけではなく、学習塾の教員や中学校教員による話、あるいは学校の進学実績といったようなデータも欠かせないものである。

よって、報告者は、本海外調査を9月（中国で新しい学期が始まる時期）に計画し、実施した。

## 2.3 博士論文における位置づけ

報告者は、中国における親の教育戦略を家族が保有する資本構造、私事性などの視点から社会学的に検討する博士論文の執筆を目指している。研究方法は、量的アプローチと質的アプローチを組み合わせる混合研究方法を用いる予定である。

前述のように、報告者は、①博士後期課程の2年次前半までは、修士論文の量的なデータの再分析を行った。そこでは、親の意識や行動に関する規定要因を家族の保有する資本の視点から検討した（①量的アプローチ）。

そして、これらの知見を肉付けるために、2年次後半からは、幅広い学歴層・職業層を対象とした事例収集を始めた。親の行動（学校選択）がどのような変化を経て形成されるのか、といった具体的なプロセスの解明を試みたいと考えている（②質的アプローチ）。

本研究は②の質的アプローチの一部に位置づけられ、2回目の聴き取り調査と合わせて、博士論文の中核になる。これによって、博士論文に向けてのデータの大半が収集できた。

## 3. 調査とデータの概要

本海外調査は、報告者が2012年9月1日から14日にかけて行ったものである。調査対象者は、調査時点で小学生あるいは中学生の子どもの持つ家庭の親とした。そのうち、新規の対象者は17名で、上記2回目の聴き取り調査による追跡調査の対象者は6名である。

### 3.1 調査の概要

まず、新規事例の収集は、無作為ではなく、なるべく多様な職業の対象者を扱うように選定した。第一段階では、機縁法を用いて、異なる職業の知人を通じて対象者の募集を行った。第二段階では、調査に協力してくれた対象者に、学歴あるいは職業の条件を満たした友人や同僚の紹介を依頼して、調査対象者を拡大した。

次に、調査地域の選定は、以下のような2つの理由に基づき行われた。

第一に、浙江省慈溪市は、中国で民営教育がもっとも発達している地域の1つである。中国国家教育部が行った民営学校に関する研究調査の報告書（沈 2006, 32-59）や中国民営教育研究グループが編集した著書（陶・王 2010, 250-255）で、その事例が紹介されている。それによれば、慈溪市の民営学校のほとんどは1990年代後半に設置され、2000年以降に、在籍生徒数が急増している。

また、陶・王（2010, 2-251）の紹介によれば、各学校段階における民営学校のシェアについて、慈溪市は浙江省や全国水準を大きく上回っている。例えば、2008年のデータでは、中学校段階において、民営学校学校数の割合は、中国全国は7.6%で、浙江省は8.4%であるのに対して、慈溪市は15.9%と遥かに高い。そして、在籍している生徒数の割合をみた場合、慈溪市は18.5%という高い比率で、全国の7.7%と浙江省の10.0%を超えている<sup>3</sup>。

第二に、浙江省慈溪市<sup>4</sup>は、中国で民営経済が最も発達している地域の1つでもある。市の政府部

門のホームページの紹介で、「民営経済」というキーワードは市の「名刺」として使われている。そのほとんどは、製造業、卸業・小売業とサービス業である。例えば、当市は、世界最大のアイロン、トランプの生産地、アジア最大のタイヤ用資材（タイヤコード）生産地として有名であり、中国国内では、家電やコンセント、釣り具の生産地として知られている。

最後に、聴き取りの際には、半構造化面接法を用いた。すべての対象者に対して、30分から150分程度の面接を行った。内容は、子どもの民営中学受験をめぐる予定や経験、それに向けての準備、最終的に進学先を決めるまでの家族の意思決定などに関するものである。

### 3.4 データの概要

最初に、新規の聴き取り調査から得られたデータの概要を説明する。

表1-新規調査対象者リスト

番号	居住地	親の属性					子どもの属性			
		続柄	年齢	学歴	職業	年間世帯所得	性別	きょうだい	学年	
1*	近郊	母親	31	小3中退(無学歴)	農民工(貴州省出身)	8.4万元	息子	2人	小5	
		父親	37	中1中退	農民工(貴州省出身)					小4
2	近郊	母親	42	小卒	病院の漢方煎薬係	5~6万元	娘	なし	高1	
		父親	45	中卒	タクシー運転手					
3	近郊	母親	44	小卒	主婦	約5万元	娘	姉(既婚)	中2	
		父親	52	中卒	会社職員					
4	近郊	母親	不明	小卒	主婦	20~30万元	息子	姉(高2)	小3	
		父親	不明	高卒	会社経理					
5	近郊	母親	48	中1中退	工場従業員(調査時リストラされたばかり)	5万元未満	息子	姉(大学2年)	中2	
		父親	48	小5中退(無学歴)	工場従業員(機械修理)					
6	市内	母親	44	中1中退	主婦	100~200万元	息子	姉(病死)	小4	
		父親	46	中卒	自営業(会社経営)					
7	近郊	母親	35	中1中退	主婦(江蘇省出身)	40~50万元	息子	なし	中1	
		父親	39	中卒	自営業(工場経営, 江蘇省出身)					
8	市内	母親	35	師範学校卒	小学校教員	110万元	息子	なし	小3	
		父親	35	職業高校卒	自営業(食堂チェーン店経営)					
9*	市内	母親	39	高卒	主婦	11~12万元	娘	なし	中1	
		父親	43	大専	刑務所教官					
10*	市内	母親	40	高卒	職員(病院財務)	20万元	娘	なし	中2	
		父親	42	不明	医者					
11	市内	母親	35	大専卒	貿易会社管理職	50万元以上	娘	なし	小2	
		父親	37	大卒	医者					
12*	市内	母親	38	大専卒	銀行職員	20万元	息子	なし	中1	
		父親	41	大卒	裁判官					
13	市内	母親	35	大卒	会社職員	15万元	息子	なし	小2	
		父親	36	大専卒	会社職員					
14	市内	母親	36	大卒	医者	20万元	娘	なし	小2	
		父親	37	大専卒	企業管理職					
15	近郊	母親	30	大卒	看護師	10数万元	娘	なし	小2	
		父親	37	大卒	薬剤師					
16	市内	母親	36	大卒	貿易会社事務	10万余元	娘	なし	小6	
		父親	40	大卒	貿易会社財務					
17	市内	母親	40	大卒	公務員(幹部)	約30万元	娘	なし	中3	
		父親	44	大卒	公務員(幹部)					

注:a)\*は父親から面接を行った意味である。

表1は、17事例の基本状況を、母親の学歴（教育年数）の高低順で整理したものを示している。母親が同じ学歴を持つ場合は、父親の学歴を参照した。表のように、直接聴き取り調査に協力してくれた対象者の内、母親は13人で、父親は4人である。年齢は30代前半から50代前半まで幅広い。そして、母親学歴から見た場合は、「無学歴=1、小卒（中学校中退含む）=6、高卒（師範学校含む）=3、大卒（大専卒含む）=7」となっている。また、その職業は、農民工、病院の漢方煎薬係、主婦、リストラされた工場従業員、タクシー運転手、刑務所の教官、医者、看護師、裁判官、公務員（幹部）といった多様な職種となっている。さらに、年間世帯所得については、最低5万元未満で、最高100万~200万元に達しており、非常に大きな差がある。最も所得が高いのは自営業者の親である。しかし、彼らの学歴は決して高くないことも分かる。

さらに、子どもの属性について説明する。本調査から収集してきた事例の内、息子を持つ親は8名で、娘は9名である。そのほとんどは一人っ子である。彼らの学年は小2から中3までに分散している。9月の調査時点では、娘が高1の事例が1例（表3、番号2）含まれている。それは、①2回目の調査（2012年4月~5月）の時に中3の子どものと同じ学年であった点（中国では9月が新学期）、②この対象者の娘は当時民営中学を選択し、この選択が3年後子どもにどのような帰結をもたらしたかを検討するのに有効であると考えた点の2点から、この事例を対象リストに入れた。

次に、追跡調査から得られたデータの概要を説明する。今回は、前述した2回目の聴き取り調査の対象者の内、当時小6の子どもに民営受験をさせる予定をしていた親6名に対して、受験の結果や最終の進学先についての追跡調査を行った。そのなか、当初（受験前）の希望に反する選択を行った事例もあれば、希望通りに民営学校に進学させた例や、受験に失敗して何らかのコネなどを使って入学させた例などもあった。

最後に、客観的な情報収集に関する調査の概要を説明する。今回は、市内にある大手塾で事務の仕事をしているスタッフに、通塾の事情や教員の待遇などについて尋ねた。また、ある民営学校の教員に、今年度の進学実績や教員募集、待遇などについて話を聞いた。

#### 4. 本海外調査における成果

本海外調査には、平成24年度「女性リーダーを創出する国際拠点の形成」プロジェクト「学生海外派遣」プログラムのご支援をいただき、心より感謝を申し上げます。

本海外調査から収集したデータは、2回目の聴き取り調査を補うもので、報告者は博士論文に向けてのデータ準備の大半を終えることができた。具体的には、①2回目の調査データでは、対象者の職業に偏りがある（例えば、大卒者のほとんどは教員という職業に集中している）という不足点が残っていたが、本調査で新規に収集した事例はその点を改善し、より幅広い層のデータとなった。②2回目の調査では、中学生の親のデータを除けば、小学生の親から聴き取ったのは、あくまでも受験前の希望であったため、受験後の結果によって親の教育戦略がどのように変わったかを検討することはできなかった。この不足点を、今回の追跡調査によって改善できたと思われる。

#### 5. 今後の課題

今後は、これまで収集してきたデータを整理し、家族の保有する資本構造や私事性などの視点から、親の教育戦略の変化をテーマに、分析を行う予定である。

今回の調査で得られた成果は、日本教育社会学会や日本家族社会学会における学会発表や学会誌への投稿論文の形で社会へ発信することを目指している。さらに、それらを今後執筆する報告者の博士論文の重要な一部として組み入れたいと考えている。

#### 注

1. 民営中学校とは、日本でいう私立中学校に相当する。なお、本研究では対象外としているが、地方農村からの出稼ぎ者の子どもを対象とする簡易に設置された民営学校も出現しており、中国では、「民工子弟学校」さらに「棚户（バラック）学校」と呼ばれている（篠原 2009, 149）。また、民営中学受験は、原語で「小昇初考試」という。小学校から初等中学校（中学校）に進学するための試験という意味である。
2. 浙江省は、長江デルタ以南に位置する中国南東部沿岸地域にある。そして、慈溪市は、浙江省の東部に位置し、上海・杭州・寧波を結ぶデルタ地区において、臨海工業都市としての役割を大きく果たしている。詳細は、馬（2010, 282）を参照する。
3. 参考資料として、慈溪市における民営中学校のシェアを日本における私立中学校のシェアと比較してみる。日本文部科学省が発表した2011年データによれば、中学校段階の私立学校数の割合は7.1%（763校）で、私立学校の在学者数も7.1%（254,703人）となっている。ここから、民営中学校のシェアに関して、慈溪市は日本より高いことが分かる。（文部科学省『平成23年度学校基本調査（確定値）について（報道発表資料）』より、[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/k\\_detail/1315581.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/k_detail/1315581.htm), 2012年9月28日閲覧）
4. 以下の内容は、慈溪市人民政府HPを参照した。（[http://cx.ningbo.gov.cn/art/2009/7/22/art\\_21152\\_322946.html](http://cx.ningbo.gov.cn/art/2009/7/22/art_21152_322946.html), 2012年9月28日閲覧）

#### 参考文献

- 樋田大二郎（1993）「プライベートゼーションと中学受験—英国の教育改革と日本の中学受験の加熱化—」『教育社会学研究』52, 72-91.
- 片岡栄美（2008）『子どものしつけ・教育戦略の社会学的研究—階層性・公共性・プライベートゼーション—』片岡栄美編、平成17年度～平成19年度科学研究費補助金 基礎研究（B）研究成果報告書（はしがき）.
- 馬芳芳（2010）「親の教育期待に関する社会学的研究—中国浙江省3中学校の保護者調査から—」『お茶の水女子大学人間文化創成科学論叢』13, 279-288.
- 馬芳芳（2011a）「だれが中国の子どもの『努力』を決めているのか—学校内学習時間および通塾・習い事に着目して—」日本教育社会学会第63回大会における口頭発表（於お茶の水女子大学）.

- 馬芳芳 (2011b) 「沸騰する進学熱 現代中国における親の教育戦略に関する社会学的研究—小中学校および民営・公立学校間の比較—」日本家族社会学会第21回大会における口頭発表（於甲南大学）。
- 馬芳芳 (2011c) 「親の社会関係資本が子どもに作用する経路—2人の中国人母親による事例を通して—」『PROCEEDINGS 公募研究成果論文集』20, お茶の水女子大学グローバルCOEプログラム, 183-192 (研究ノート)。
- 中西裕子 (2011) 「公立学校制度改革と親の意識の地域差—誰が『脱出』オプションを選択できるのか?—」石川由香里・杉原名穂子・喜多加美代・中西裕子著『格差社会を生きる家族—教育意識と地域・ジェンダー—』有信堂高文社, 30-60.
- 篠原清昭 (2009) 『中国における教育の市場化—学校民営化の実態—』ミネルヴァ書房。
- 多賀太 (2012) 『『教育する父』の意識と行動—中学受験生の父親の事例分析から—』関西大学『教育科学セミナー』43, 1-18.
- Phillip Brown (1997) The 'Third Wave': Education and the Ideology of Parentocracy, edited by A.H.Halsey, Hugh Lauder, Phillip Brown, and Amy Stuart Wells, *Education Culture, Economy, and Society*, Oxford University Press, 393-407.
- 李芳 (2008) 「北京市義務教育階段択校的現状分析」『教育科学研究』, 26-30.
- 曲紹衛・楊克 (2007) 「択校教育与個人人力資本積累—北京市択校調査及実証帰因—」『教育与経済』4, 11-14.
- 沈劍光 (2006) 『跨越式發展的民弁学校』, 高等教育出版社。
- 陶西平・王佐書主編 (2010) 『中国民弁教育』中国民弁教育協会組編, 教育科学出版社。

まー ふあんふあん／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 人間発達科学専攻

### 指導教員によるコメント

馬さんは、中国で近年急速に進行する教育の市場化現象の下での親の教育戦略を、家族の保有する資本構造や私事化の視点から実証研究を行い、現代中国社会における教育の不平等構造を明らかにする博士論文に取り組んでいる。

馬さんは、独自に行った量的調査による研究結果を踏まえて、昨年度からは幅広い学歴や職業層の親を対象とした聴き取り調査による事例収集を行ってきた。今回は、平成 24 年度「女性リーダーを創出する国際拠点形成」プロジェクト「学生海外派遣」プログラムにかかわる支援により、2012 年 9 月 1 日から 14 日にかけて、3 回目の聴き取り調査を実施した。今回の調査から得られたデータは、馬さんのこれまでのデータの不足点を補うことができ、調査地域における親の教育戦略の変化をリアルタイムに追うために有効である。こうしたデータ収集作業は、博士論文執筆に向けての重要な過程であると評価できる。

今後は、綿密な分析を行い、学会報告や学会誌への投稿を通して、今回の助成による成果を社会に発信できるものとする。馬さんに研究の更なる発展を期待している。

(お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 (人間科学系) 教授・耳塚 寛明)

## **An Interview Research on Activity of the Mothers' Association for Family Planning in Oryu-ri, Korea from the 1960s to the 1970s**

Ji-yeon Lee

I received subsidy from International Research Program for the Advancement of Women in Leadership in August, 2012, and carried out research in Korea. The purpose of this research is to investigate a situation of the family planning project from the 1960s to the 1970s and to examine how it influenced the women living in villages by interviewing the former members of the Mothers' Association for Family Planning in the area called Oryu-ri, Korea. I will reflect the analysis of the interview on my doctoral theses on the family planning project and women in Korea from the 1960s to the 1970s.

## **The Field Research on early childhood care and education in Jordan**

Shoko Koyama

This is a report of the visits to five kindergarten sites and two homes in Anman and Madaba in Jordan from the 17th to the 26th of September in 2012.

Three of the kindergarten sites are public ones, one is private and the other is run by UNRWA. Their common purpose is to teach Arabic letters and the numbers. There are some differences in the supply of teaching materials and playing toys among the kindergarten sites. However, all the kindergarten sites have enough teaching supplies and materials which are provided by the support of US AID. Collecting objective data in Jordan is my greatest challenge.

## Confinement-induced compartmentalization of vesicles

Ai Sakashita

There are a few studies have focused on multi-lamellar vesicle shapes [1], because of the experimental difficulty of the preparation and treating. However most of actual cell organelles form multiple membranes. For example mitochondrion contains outer and inner bilayer membranes. The inner membrane has much larger surface area than outer one, and forms numerous invaginations called crista. Thus the confinement of outer membrane plays an important role to determine inner shapes.

In this study, we simulated the confined vesicles using a dynamically-triangulated surface model [2] and obtained several new vesicle morphologies. In particular, we found the confinement-induced compartmentalization of vesicles. Some of the vesicle shapes agree quite well with those of multilamellar liposomes observed in experiments.

[1] O. Kahraman, N. Stoop, M. M. Müller, *New J. Phys.* **14**, 095021 (2012).

[2] H. Noguchi, and G. Gompper, *Phys. Rev. E* **72**, 011901 (2005).

## **A research on works by Suzan=Lori Parks**

Rino Sato

This research is conducted at the TOFT center of the New York Public Library in an attempt to analyze plays by Suzan=Lori Parks. Addressing her unique perspective on African- American history and culture through her works such as *The Death of the Last Black Man in the Whole Entire World* (1990), *The America Play* (1994), *Venus* (1996), and *Topdog/Underdog* (2001), Parks is now regarded as one of the most innovative African-American playwrights in contemporary American theatre. Based on the archival research on Parks's theatrical production, this research project has examined Parks' dramaturgy that reflects her major question of how to represent history.

## **Research for source materials on W.W. Cobbett (1847-1937) and “Phantasy”**

Taeko Nishizaka

The aim of this research is to obtain information on W.W. Cobbett, a British amateur musician and a patron of chamber music, and his promotion of “phantasy.” Through examination of related materials, including primary sources in libraries in London, various details of Cobbett's patronage have been revealed. His relationships with two groups, the Worshipful Company of Musicians and the Society of Women Musicians seem to be especially important. With the former, Cobbett held the “phantasy” competition for the first time. With the latter, he cooperated with women musicians. The placement of “phantasy” in his work should be considered in future research.

## **The research of Les Ballets des Champs-Élysées in the Bibliothèque-Musée de l'Opéra**

Natsumi Fukasawa

The purpose of this research was gathering and checking all informations about Les Ballets des Champs-Élysées in the Bibliothèque-Musée de l'Opéra National de Paris.

I've visited that Bibliothèque to research various reviews and critiques of original works. These are deposited in files of each artist and dance work. I've also checked programs and photos, and music score.

Moreover in the Cinémathèque de la Danse, I've researched some documentaries of Janine Charrat and checked parts of TV-news films about that company (1945-1951).

This work will clarify the whole activity of Les Ballets des Champs-Élysées. The value and meaning of this company in the context of the postwar French-dance will appear.

## **Practice report on the explicit instruction of the communication strategies —Case of Chinese Japanese learners in China—**

YingLin Fang

This report, which is a part of "the student research abroad", caught the furtherance of the project "The bringing up of an international active Woman leader" in 2011. The method details and contents of explicit training of communication strategies to Chinese Japanese learners are summarized in this report. In this practice, the author attempted to introduce a method, which attaches greater importance to the characteristics of the Contact Situation communication, to the Japanese major students with different proficiency. Furthermore the "Peer-Learning" method, which promotes independent learning ability of the learners, was also introduced. The knowledge acquired from this practice is expected to contribute to Japanese conversation education in China.

## **Changes of Parental Education Strategies before and after Junior Middle School Entrance Examination: Cases from Cixi city of Zhejiang Province, China**

Fangfang Ma

The changes of parental education strategies before and after the private junior middle school entrance examination were investigated by analyzing the parental attentions on the examination. Semi-structural interviews with typical parents of different careers from Cixi city of Zhejiang Province (China) were carried out. The interviews were continuation of those performed in April and May this year. 17 new interviewees from migrant workers, laid-off workers, doctors, policemen, judges and managers were visited. 6 samples whose children were preparing the entrance examination in last interview were tracked.

---

書名	文部科学省特別経費「女性リーダーを創出する国際 拠点の形成」(平成 22 年度—平成 27 年度) 平成 24 年度「学生海外派遣」プログラム報告集
発行日	平成 25 年 3 月 31 日
編集・発行	国立大学法人 お茶の水女子大学 リーダーシップ養成教育研究センター 〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1 TEL 03-5978-5520 E-mail info-leader@cc.ocha.ac.jp URL <a href="http://www.cf.ocha.ac.jp/leader/">http://www.cf.ocha.ac.jp/leader/</a>
編集事務	国立大学法人 お茶の水女子大学 リーダーシップ養成教育研究センター アカデミック・アシスタント 小濱 聖子
編集協力	国立大学法人 お茶の水女子大学 文教育学部 アカデミック・アシスタント 浦川 修子

---